

令和7年度

講義要項

子ども教育学研究科子ども教育学専攻
修士課程

埼玉学園大学大学院

成績評価について

〔成績評価の方法〕

授業科目毎の成績評価方法は各科目のシラバスに記載されています。評価項目ごとに配点比率が明示されていますので、確認してください。

〔成績評価の内容〕

成績は、「S」「A」「B」「C」「D」と表記されます。このうち「S」「A」「B」「C」は合格です。合格と判定された科目には所定の単位が与えられます。「D」と表記された科目は不合格ですので単位は修得できません。具体的な評価内容は以下のとおりです。

素点	100～90	89～80	79～70	69～60	59～0
成績通知表	S	A	B	C	不可
成績証明書(和文)	S	A	B	C	表記しません
成績証明書(英文)	S	A	B	C	表記しません
合否	合 格				不合格

※ 令和4年度までの成績評価で、素点が90点以上だったものは「S」として取り扱います。

目 次

教育人間学特論（松浦加奈子）	1
子ども発達特論（千崎 美恵）	2
学習心理学特論（中本 敬子）	3
発達障害支援特論（増南 太志）	4
子どもと家庭支援特論（杉浦 浩美）	5
学校マネージメント特論（堀井 啓幸）	6
多文化子ども教育特論（堀田 正央）	7
教育方法学特論（石橋 優美）	8
教育実践研究特論（薄井 好人）	9
子どもの言葉特論（幼稚園）（中山佳寿子）	10
子どもの言葉特論（小学校）（佐内 信之）	11
子どもの環境特論（長友 大幸）	12
子どもの数・図形概念特論（森田 大輔）	13
子どもの科学認識特論（長友 大幸）	14
子どもの造形表現特論（森本 昭宏）	15
子どもの音楽表現特論（東元 りか）	16
子どもと道德特論（堀田 諭）	17
小学校授業実地研究（佐内 信之・森田 大輔）	18
幼児教育実地研究（大島真里子・岡南 愛梨）	19
教材・環境開発演習（長友 大幸・森本 昭宏）	20
いじめ・自殺・不登校問題演習（増南 太志・薄井 好人）	21
地域連携プロジェクト演習（堀田 正央・杉浦 浩美）	22
教育課題研究Ⅰ（長友 大幸）	23
教育課題研究Ⅰ（杉浦 浩美）	24
教育課題研究Ⅰ（堀田 正央）	25
教育課題研究Ⅰ（増南 太志）	26
教育課題研究Ⅰ（石橋 優美）	27
教育課題研究Ⅰ（薄井 好人）	28
教育課題研究Ⅰ（千崎 美恵）	29
教育課題研究Ⅰ（東元 りか）	30
教育課題研究Ⅰ（堀田 諭）	31
教育課題研究Ⅰ（松浦加奈子）	32
教育課題研究Ⅰ（大島真里子）	33
教育課題研究Ⅰ（岡南 愛梨）	34
教育課題研究Ⅰ（佐内 信之）	35
教育課題研究Ⅰ（中山佳寿子）	36
教育課題研究Ⅰ（森田 大輔）	37
教育課題研究Ⅱ（長友 大幸）	38
教育課題研究Ⅱ（杉浦 浩美）	39
教育課題研究Ⅱ（堀田 正央）	40
教育課題研究Ⅱ（増南 太志）	41
教育課題研究Ⅱ（石橋 優美）	42
教育課題研究Ⅱ（薄井 好人）	43
教育課題研究Ⅱ（千崎 美恵）	44
教育課題研究Ⅱ（東元 りか）	45
教育課題研究Ⅱ（堀田 諭）	46
教育課題研究Ⅱ（松浦加奈子）	47
教育課題研究Ⅱ（大島真里子）	48
教育課題研究Ⅱ（岡南 愛梨）	49
教育課題研究Ⅱ（佐内 信之）	50
教育課題研究Ⅱ（中山佳寿子）	51
教育課題研究Ⅱ（森田 大輔）	52
教育課題研究Ⅲ（長友 大幸）	53
教育課題研究Ⅲ（杉浦 浩美）	54
教育課題研究Ⅲ（堀田 正央）	55
教育課題研究Ⅲ（増南 太志）	56
教育課題研究Ⅲ（石橋 優美）	57
教育課題研究Ⅲ（薄井 好人）	58
教育課題研究Ⅲ（千崎 美恵）	59
教育課題研究Ⅲ（東元 りか）	60
教育課題研究Ⅲ（堀田 諭）	61
教育課題研究Ⅲ（松浦加奈子）	62
教育課題研究Ⅲ（大島真里子）	63
教育課題研究Ⅲ（岡南 愛梨）	64
教育課題研究Ⅲ（佐内 信之）	65
教育課題研究Ⅲ（中山佳寿子）	66
教育課題研究Ⅲ（森田 大輔）	67
教育課題研究Ⅳ（長友 大幸）	68
教育課題研究Ⅳ（杉浦 浩美）	69
教育課題研究Ⅳ（堀田 正央）	70
教育課題研究Ⅳ（増南 太志）	71
教育課題研究Ⅳ（石橋 優美）	72
教育課題研究Ⅳ（薄井 好人）	73
教育課題研究Ⅳ（千崎 美恵）	74
教育課題研究Ⅳ（東元 りか）	75
教育課題研究Ⅳ（堀田 諭）	76
教育課題研究Ⅳ（松浦加奈子）	77
教育課題研究Ⅳ（大島真里子）	78
教育課題研究Ⅳ（岡南 愛梨）	79
教育課題研究Ⅳ（佐内 信之）	80
教育課題研究Ⅳ（中山佳寿子）	81
教育課題研究Ⅳ（森田 大輔）	82

授業概要

本講義では、「人間とは何か」という問いに対して、社会集団の機能や役割、学校教育の諸問題から考察することを目的とする。そのために、他者との関係性から自己を問い、これまでの学校経験における自らの価値観を相対化する視点を身につけていく。また、教育学の知見に留まらず、社会学や哲学、障害学の知見からも積極的に学びながら「教育」と「人間」について多角的に考えを深めていくようにする。

授業計画

第1回	イントロダクション	一人間にとって教育とは何かー
第2回	社会化論の展開①	社会で生きる〈わたし〉
第3回	社会化論の展開②	変容する家族
第4回	社会化論の展開③	親密な関係性の変容
第5回	社会化論の展開④	学校における規範と秩序
第6回	社会化論の展開⑤	学校の中のジェンダー
第7回	逸脱行動と社会問題①	居場所と承認
第8回	逸脱行動と社会問題②	長期欠席から不登校へ
第9回	逸脱行動と社会問題③	教育言説としてのいじめ現象
第10回	逸脱行動と社会問題④	障害と支援の関係性
第11回	逸脱行動と社会問題⑤	共生社会への展望と実践
第12回	現代社会における人間形成①	貧困問題と学校教育
第13回	現代社会における人間形成②	包摂と排除の議論から捉える教育の可能性
第14回	個人報告と討議①	社会の変化に対応した教育を考える
第15回	個人報告と討議②	社会の変化に対応した教育を考える

到達目標

- ・自己と他者との関係を整理しながら人間形成の社会的基礎の理論を理解することができる。
- ・これまでの学校経験に基づいた自らの価値観を相対化させ、教育現象を複眼的・批判的に捉えることができる。
- ・現代社会の変化と問題点を指摘し、それについての見解を整理して発表・議論することができる。

履修上の注意

- ・本授業では受講生が各授業のテーマに合った文献報告を担当する。作成したレジュメに基づき、発表・議論していくため、事前準備が求められる。
- ・授業の後半の個人報告では、これまでの授業を踏まえた総括的議論を行う。
- ・授業で取り上げたトピックについては自ら関連資料を調べ、考察する習慣を身につけておくこと。

予習・復習

- ・文献報告や個人報告では授業時間外の事前準備が必要である。
- ・報告担当でない場合も、文献や参考資料を読み込んでから授業に臨み、積極的に参加すること。

評価方法

- ・授業内の文献報告・個人報告のレジュメ（60%）・議論（40%）から総合的に評価する。

テキスト

講読文献は初回の授業にて受講者と相談の上、指示する。

参考文献

保坂亨（2019）『学校を長期欠席する子どもたちー不登校・ネグレクトから学校教育と児童福祉の連携を考える』明石書店。
 星加良司（2007）『障害とは何か：ディスアビリティの社会理論に向けて』（生活書院）
 ネル・ノディングズ（2007）『学校におけるケアの挑戦ーもう一つの教育を求めて』（ゆみる出版）

授業概要

子どもの発達を多角的に捉える視点を持って深く理解することを目的とする。そのために、発達心理学の主要な発達理論を概観し、子どもの認知、情動、社会性などの諸側面に関する発達過程および人の発達を支える視点をおさえて、分析、考察していく。授業では、発達心理学に関するテーマ、および、受講生が問題意識を持ったテーマについて、受講生が作成したレポートの報告を中心に文献講読と討論にて進めていく。事例分析については、受講生が、現代的な子どもの発達に関するテーマを掲げて発表と討論を行えるよう指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：発達とは何か
第2回	生涯発達の視点からとらえた子どもの発達
第3回	子どもの発達に関わる基礎理論
第4回	乳幼児期のこころの発達と環境要因
第5回	児童期・思春期のこころの発達と環境要因
第6回	認知・言語・社会性の発達
第7回	アタッチメント形成と情動・パーソナリティの発達
第8回	論文講読と討論①幼児期の発達と個人差
第9回	論文講読と討論②幼児期の家庭環境とその支援
第10回	論文講読と討論③児童期の発達と個人差
第11回	論文講読と討論④児童期の仲間関係・いじめ・不登校
第12回	事例分析①：幼児期における問題行動とその要因
第13回	事例分析②：幼児期における言葉の遅れとその支援
第14回	事例分析③：児童期における不適応行動とその要因
第15回	事例分析④：児童期における学習の遅れとその支援
第16回	授業のまとめ／最終レポートの提出

到達目標

1. 子どもの発達過程と発達に関する主要理論や概念を理解できる。
2. 現代の子どもを取り巻く発達に関わる問題とその要因を理解できる。
3. 子どもの発達を支えるための発達支援の方法を探る視点を獲得する。
4. 子どもの発達に関する研究方法や分析の視点を理解できる。

履修上の注意

本授業は対話形式で学びを深める。授業は、受講生が事前に作成したレポートを中心に講読と討論を進めていくので、主体的な学習と積極的な参加を期待する。

予習・復習

担当となった文献・事例発表については、授業時間外での事前準備が必要である。発表の担当でない場合も、文献や事例について読み込み、考察して討論に備えること。

評価方法

授業中の発表レジュメと討議（50%）、最終レポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

適宜紹介する。

授業概要

幼稚園及び小学校のミドルリーダーには、幼児児童の学習を支援するため、体系的な教育実践を構想する力が必要である。そこで、本科目では、幼児期から児童期にかけての発達や学習の基本現象や理論を習得した上で、これらに基づいて教育実践の事例を分析的に捉え、より効果的な指導や学習環境について具体的に考察していく。授業では、基本現象や理論の習得については講義と文献読解を、事例分析等については受講生による発表と討論を中心として進める。

授業計画

第1回	イントロダクション（本授業とミドルリーダーとしての力量と授業のねらい、授業の進め方。受講生の学習観の確認）
第2回	学習の基礎理論（行動主義、認知主義、状況主義）
第3回	情報処理モデル（記憶のマルチストアモデル、ワーキングメモリ）
第4回	知識の表象（概念とカテゴリー、スキーマ、スクリプト）
第5回	知識の構成過程としての学習（認知的構成主義、社会的構成主義）
第6回	発達の観点から見た学習（思考の発達に関する基礎理論）
第7回	言語、数学的概念、科学概念の発達（語彙と文法規則の発達、数唱方略と数概念の発達、科学概念の変容）
第8回	メタ認知（学習におけるメタ認知の役割、メタ認知の発達）
第9回	学習を支援するための学習環境のデザイン（問題解決型学習、協働学習、形成的フィードバック）
第10回	幼児期における他者とのやりとりに基づく学習に関する事例分析
第11回	幼児期における体験に基づく学習に関する事例分析
第12回	児童期における数的概念の学習に関する事例分析
第13回	児童期における科学概念の学習に関する事例分析
第14回	児童期における言語力の育成に関する事例分析
第15回	展望（今後の学習支援のあり方についての検討）

到達目標

1. 知識やスキルの習得のメカニズムを心理学的観点から理解する。
2. 乳幼児期から児童期にかけての知的発達と学習との関連を基礎理論を踏まえて理解する。
3. 授業等における幼児・児童の学習を分析的に検討する力を身につける。
4. 幼児・児童の学習を支援するための授業や学習環境をデザインするための手がかりを得る。

履修上の注意

履修にあたっては、これまでに受講した教育心理学や学習心理学関連の授業内容を確認しておくことが望ましい。また、各回の授業で予習や発表準備等の事前学習、授業内容に基づくミニ・レポート等を課すので積極的に取り組んでもらいたい。

評価方法

情報処理モデルや知識表象、学習と発達に関する理論等の基本的知識については、小テストやミニ・レポートによって評価する（30%）。また、学習指導・支援の分析については、授業時の発表や討論、ミニ・レポートにより評価する（30%）。学習支援のための指導や学習環境デザインについては、期末レポートによって評価する（40%）。

テキスト

テキストは使用せず、資料を配付する。また参考になる図書については授業中に適宜紹介する。

授業概要

発達障害児の行動特性を理解するための理論や、原因となる問題を特定するためのアセスメントについて代表的なものを中心に講義する。また、アセスメント結果を用いて、発達障害児に対応する方法を示しながら、理論と実践を結びつけた支援のあり方について講義する。

授業計画

第1回	オリエンテーション 本講義の目的と進め方、本授業とミドルリーダーとしての力量を到達目標との関わりを講義する。
第2回	発達障害の現状と各種障害の定義
第3回	発達障害の理論とアセスメントの意義
第4回	LDの種類と認知特性に関する理論
第5回	LDの認知的な偏りをとらえるためのアセスメント
第6回	LD児の事例と指導プログラム
第7回	ADHD児の行動特性を説明する理論
第8回	ADHDの行動特性をとらえる質問紙と原因特定のための検査
第9回	ADHDの理論に基づく対応の事例
第10回	自閉スペクトラム症児の特徴とその症状を説明する理論
第11回	自閉スペクトラム症の症状理解のためのアセスメント
第12回	自閉スペクトラム症児の事例と指導プログラム
第13回	LD児の理論とアセスメントに関する研究論文講読
第14回	ADHD児の理論とアセスメントに関する研究論文講読
第15回	自閉スペクトラム症児の理論とアセスメントに関する研究論文講読

到達目標

1. 現在の教育における子どもの発達障害の現状について理解できる。
2. 発達障害児の行動特性を学び、その行動を理論的に捉える視点を獲得することができる。
3. 発達障害の原因となる問題をとらえるためのアセスメントについて理解し、対応方法を探る視点を獲得することができる。

履修上の注意

資料等は事前に読んで、専門用語は調べておくこと。各回、発達障害の現状と本授業内容を関連づけ、各自、その考察をノートにまとめ、次時にその考察を更に探求するといった、知見を基に身近な問題を考察する習慣をつけること。

評価方法

発達障害に関わる諸問題について、理論を踏まえた解決の在り方を、各自が協働してディスカッションできたか、また、レポートを基に、各自の問題意識が深化されたかを評価する。ディスカッション（40%）、レポート（60%）とする。

テキスト

授業時に指示する。

授業概要

「家族」「家庭」をとりまく社会環境は大きく変容している。それに伴い、子どもとその家族メンバーが求める「支援」も多様化している。本授業ではまず、家族社会学の知見を用い「家族」をとらえる視点を鍛える。さらに人口構造、労働市場、経済環境、政策動向、社会意識などマクロな観点から「子どもと家族」の置かれた状況を構造的に読み解く力を身につける。そのうえで、個々の家族の事情やニーズといったミクロな視点から問題をとらえなおし、検討する。子どもの成長を担う専門職は家庭支援者として個別かつ多様なニーズに応える力が求められている。適切な支援について自らが判断できるよう、学術的なアプローチとともに実践力を養うことを目的とする。

授業計画

第1回	オリエンテーション ～ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけと授業のねらい
第2回	家族論へのアプローチ～家族社会学の観点から
第3回	家族論へのアプローチ～ジェンダー学の観点から
第4回	家族機能の変容
第5回	多様化する家族形態
第6回	家族政策の動向
第7回	労働市場と家族のありよう
第8回	前半のまとめとディスカッション
第9回	家族福祉論～さまざまな事情を抱えた家族への支援
第10回	ひとり親家庭と子どもの貧困
第11回	セクシュアル・マイノリティと教育現場
第12回	支援者として 1「ケア」と「労働」の視点から
第13回	支援者として 2「感情労働」の視点から
第14回	家族をエンパワーするために～1 個人報告とディスカッション
第15回	家族をエンパワーするために～2 個人報告とディスカッション

到達目標

1. 「家族」に関する最新の理論やアプローチ方法を学ぶ。
2. 現代の「家族」が抱えている問題や困難について理解を深める。
3. 問題を構造的に読み解く力を身につけ、支援のあり方を多角的に検討する。
4. 支援者としての実践力を身につける。

履修上の注意

文献講読や事例研究など、報告や議論に積極的に参加することを求める。子どもや家族に関係する社会事象に常に関心を持ち、学術的な文献はもちろん、報道や資料、幅広いジャンルの著作物などもリサーチやレビューの対象としてほしい。

予習・復習

授業では報告や議論の時間を多くとる。毎回、取り上げる文献を精読し、報告と議論の準備をすすめること。

評価方法

授業での報告内容や議論への参加態度（50％）と期末レポート（50％）で総合的に判断する。

テキスト

最初の授業で受講者と相談のうえ、講読する文献を指示する。必要に応じて資料を配布する。

授業概要

この講義では、受講生それぞれの自己形成の過程、学校教育との関わりを「ふりかえる」ことを前提に、学校教育とは何か（子どもの立場にたった教育は可能か）、学校経営とは何か、学校の組織的環境を見直す、授業の環境を見直す、生徒指導の環境を見直す、中央教育審議会答申など教育改革と学校教育との関係を見直すなどの内容を含んで、子どもの安全や地域とともにある学校など教育の今日的な課題を、教育制度学、教育経営学的に言及する。

授業計画

第1回	教職課程（教育経営）と教員養成
第2回	環境としての教育を見直す①（あなたにとって学校・教育とは）
第3回	環境としての教育を見直す②（子どもの立場に立った教育とはーオープンプラン・スクールの実践から教育経営の条件整備を考える）
第4回	環境としての教育を見直す③（学力テストと教育の質保障）
第5回	学校の制度的環境を見直す①（公教育制度の原理と課題）
第6回	学校の制度的環境を見直す②（海外の学校制度と今日的課題）
第7回	学校の制度的環境を見直す③（教育委員会と学校）
第8回	学校の組織的環境を見直す①（学校組織と教師の専門職性）
第9回	学校の組織的環境を見直す②（学級経営と「チーム学校」）
第10回	学校の組織的環境を見直す③（学校評価と学校改善ーPDCA サイクルー）
第11回	学校の実践的環境を見直す①（授業とカリキュラム・マネジメント）
第12回	学校の実践的環境を見直す②（子どもの育ちと生徒指導組織）
第13回	学校の実践的環境を見直す③（学校と家庭・地域との連携ーコミュニティ・スクールー）＊葉養先生特別講義
第14回	学校の実践的環境を見直す④（学校事故、学校安全を考える）
第15回	まとめ(新しい公共と学校)
第16回	課題レポート

到達目標

1. 公教育の目的を実現するための学校経営に関わる基本的な事項（PDCA サイクルなど）の理解や教育活動を支える人的・物的条件の理解など学校の基本的な仕組みがわかる。
2. 教育改革の動向を踏まえ、地域とともにある学校やこれからの教師の役割について、実証的・多角的に分析・検証する経験を積み、批判・考察することができる。

履修上の注意

新聞には教育問題を考えるための記事が少なからず掲載されています。授業でもトピックとして取り上げますが、新聞記事等を通して、自らの教育経験を振り返りながら、教育問題や今の子ども、学校をどうみたらいいか積極的に考えていただきたいと思います。

予習・復習

教科書の該当箇所を予習し、授業内容のイメージをもって受講すること（30分程度）。
提示された課題を真摯に取り組むこと。配布資料の再読（30分程度）
授業内容のふりかえり学習（30分程度、既知の知識や学校体験等と関連づけて理解を深める）

評価方法

①課題調査・発表内容 50%、②試験の成績 50%の合計 100%で評価する（人数により課題レポートに代える）。

テキスト

内山絵美子・山田知代・坂田仰編著『新訂第2版 保育者・小学校教員のための教育制度論』教育開発研究所、2023年
＊適宜資料も配布します（教職六法等も持参されるとよいと思います）

授業概要

OECD 諸国等の保育・教育システムや方法論、日本の多文化保育・教育の現状や課題等を通じて、多様な教育観、教育環境、教育方法について考察するとともに、ドキュメンテーションやカウンセリング等の具体的な実践について学んで行く。多文化共生社会におけるより良い教育環境構築に向けて、「保育者/教師-子ども」に留まらない広い視点で教育を捉えながら、多様なニーズを踏まえたチルドレンファースト実現にむけて、科学的根拠に基づいた講義を行う。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけの理解と導入討論(国・文化とは何か、子どもとは誰か)を行う。
第 2 回	国・文化・保育の定義と多様性
第 3 回	OECD 諸国における移民と教育問題
第 4 回	多文化主義を標榜とする国々における児童福祉・教育政策
第 5 回	社会民主主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第 6 回	保守主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第 7 回	家族主義的福祉レジームの国々における子育て支援と保育・教育
第 8 回	日本における移民政策の歴史と在日外国人の人口動態
第 9 回	日本の多文化保育・教育の現状(定量的なデータから)
第 10 回	日本の多文化保育・教育の現状(定性的なデータから)
第 11 回	外国籍や外国に繋がる子どもへの保育・教育の事例分析
第 12 回	多文化保育・教育における保育者・教師の専門性と役割の考察
第 13 回	行政における多文化保育・教育への取り組みー川口市の事例も取り上げるー
第 14 回	互惠的教育環境のためのアンチバイアス教育、ESD 教育
第 15 回	総括討論(多文化共生社会におけるあるべき保育・教育の形、地域にむけた提言)
第 16 回	課題、レポート提出

到達目標

1. 国・文化・子ども等を各自が再定義するとともに、その多様性を理解する。
2. 各国の福祉・教育政策の現状と問題点を探り、改善点を見出す。
3. 日本の多文化保育・教育の現状と課題を様々なシステムレベルで捉える。
4. 多文化共生社会における教育について各論的な提言ができる。

履修上の注意

授業内でのディスカッション等へは積極的に参加すること。
 複数回文献レビューやレポートを課すことがある。
 英語による文献・資料のために必要な者は辞書を用意すること。
 本学の位置する川口市内では、平成 26 年において 22,958 人も外国籍住民と 563 名もの外国籍児童が存在する。また平成 21 年の調査では認可保育所の 60%以上で外国につながる子どもの利用がみられている。このような特性を踏まえ、地域における実際の教育・保育に有効な、妥当性・信頼性の担保された具体的な考察や提言を行う意識をもつこと。

評価方法

文献レビューやディスカッション、期末レポート等により、多文化共生社会における教育について提言できる力を評価する。文献レビューやディスカッション(40%)、期末レポート(60%)。

テキスト

安特に定めない。適宜授業内で資料を配布するとともに、参考文献・書籍等を紹介する。

授業概要

子どもに対する教育方法について、理論的な背景（特に発達心理学、教育心理学、教授・学習心理学）から理解し、検討することを目的とする。そのために、心理学の諸分野や心理学の教科教育への応用について学ぶとともに、それらを支える教育方法に関連する心理学等の知見について学ぶ。また、関連する近年の実証的研究に触れ、効果的な教育方法に関する諸課題について分析し、考察を深めることをねらいとして講義する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：人の学びとは
第2回	発達心理学と教育方法
第3回	教育心理学と教育方法
第4回	教授学習心理学と教育方法
第5回	国語教育に関する知見
第6回	算数・数学教育に関する知見
第7回	理科教育に関する知見
第8回	社会科教育に関する知見
第9回	外国語教育に関する知見
第10回	道徳教育に関する知見
第11回	保健体育教育に関する知見
第12回	情報機器の応用に関する知見
第13回	生徒指導・進路指導に関する知見
第14回	幼児教育に関する知見
第15回	総括討論
第16回	レポートの提出

到達目標

- ・教育方法に関する主要理論や概念を理解することができる。
- ・効果的な教育方法や学習方法について、どのようなエビデンスが得られているかを理解することができる。
- ・教授学習に関わる今日的課題について、分析・探求する視点を獲得する。
- ・教育方法に関する文献を読解する力をつける。

履修上の注意

本授業は対話形式で学びを深める。教育方法に関する心理学や教科教育学の文献を適宜提示し、履修者が作成したレポートをもとに討議を行うため、積極的に参加し、自主的に学習を進めてほしい。

予習・復習

授業で取り上げる文献は、報告を担当しないものであっても読み込み、討議に備えること。報告を担当する文献については、そのテーマに関連した文献にも目を通すこと。

評価方法

授業中の討議（50%）とレポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

適宜紹介する。

授業概要

本授業は、これから研究を深めようとする大学院生に、体育科教育学の分野を通して研究に必要な基礎理論や研究方法の基礎・基本に関わる知識・情報、具体的な研究事例を分かりやすく解説し、授業実践のための準備・授業実践・実践後の検証方法について指導する。

そこで本授業では、問題点の解決方法に対してのエビデンスに基づいた検討方法、分析方法を教授するとともに、データ分析・解釈におけるディスカッションを通して、説得力のある実践研究の方法を身につけることができるように、演習の要素を取り入れた講義とする。

授業計画

第1回	オリエンテーション：体育科教育学教育実践研究の実際① 遠投距離向上を意図した短時間運動プログラムの効果検証
第2回	【実技演習】体育科教育学教育実践研究の実際② 遠投距離向上を意図した短時間運動プログラム・教材の体験
第3回	体育科教育学実践研究文献レビュー 「文献：小学校1年生を対象とした遠投距離向上に向けた運動プログラムの開発」
第4回	体育科教育学の研究手法①「理論研究」
第5回	体育科教育学の研究手法②「量的研究」
第6回	体育科教育学の研究手法③「質的研究」
第7回	体育科教育学の研究手法④「複合研究」
第8回	体育科教育学の研究手法⑤「学位論文」
第9回	体育科教育学の研究手法⑥「研究の質保証と配慮事項」
第10回	文献報告①「教材研究」
第11回	文献報告②「授業研究」
第12回	文献報告③「教師行動研究」
第13回	文研報告④「学習者行動研究」
第14回	受講生による文献報告：体育科教育学教育実践研究に係る文献
第15回	授業のまとめ
第16回	体育科教育学実践研究に関する課題レポート提出

到達目標

- 体育科教育学分野を通して、授業実践のための準備・授業実践・実践後の検証方法が理解できる。
- 体育科教育学分野の具体的な研究事例を通して、各研究方法に関する基礎理論・知識・情報を理解し、各種分析方法に関するデータ分析と解釈について検討することができる。

履修上の注意

- 体育科教育学分野を通して、各自の研究分野における研究方法を確立するという意欲で積極的に参加すること。
- 第2回の実技演習以外にも、必要に応じて実技演習を伴う場合がある。

予習・復習

- 修士論文の研究計画立案・授業実践・実践後の検証・考察に役立てられるよう、授業内で得た知識・技能を復習することが必要となる。

評価方法

次のように評価する ①各授業のディスカッション内容：50% ②課題レポート：50%

テキスト

日本体育科教育学会（編）「体育科教育学研究ハンドブック」 大修館書店,2021

授業概要

子どもの言葉を豊かに育む保育実践の歴史と現在の動向について、資料の読解を通して学ぶとともに、子どもの言葉の発達に関する現代的な課題について考察できるよう指導する。言葉の発達を促す保育実践や保育研究について、自分なりの視点を持ち、言語化できるよう多くの討議を行う。資料の入手、読解についても具体的な方法を案内する。

授業計画

Gはグループワーク、Dはディスカッション

第1回	オリエンテーション、「言葉」をめぐる現代的な課題①（短い論文を読みましょう）
第2回	保育研究とは（論文の探し方／論文をまとめてみよう）
第3回	現代の保育実践①（実践記録を読もう）
第4回	現代の保育実践②（実践研究とは何か）
第5回	保育実践の歴史①（ごっこ遊びと劇遊び 明治）
第6回	保育実践の歴史②（ごっこ遊びと劇遊び 大正）
第7回	保育実践の歴史③（ごっこ遊びと劇遊び 昭和戦前期）
第8回	保育とは何か①（昭和戦前期の「新しい保育」とは）
第9回	保育とは何か②（戦後の「伝え合い保育」とは）
第10回	発表①（実践記録を読んで）
第11回	発表②（特色のある保育）
第12回	発表③（豊かな言葉を育む遊び）
第13回	発表のまとめ（相互評価・討議）
第14回	資料の取り扱い（一次資料、論文、書籍）
第15回	まとめ（論文の構成に挑戦しよう）

到達目標

- 子どもの言葉に関わる現代的な課題を捉え、批判的思考を身に着けることができる。
- 保育実践の歴史についておおまかに理解できる。
- 現代の保育実践について自分なりの視点から論じることができる。

履修上の注意

- 本授業は対話と討議で学びを深める。
- 授業は、冒頭の講義の後は、受講生による発表、討議を中心に進めていくため、主体的な学習と積極的な参加を期待する。

予習復習

- 発表準備に関して、授業時間外での事前準備が必要である。
- 発表の担当でない場合も、資料について読み込み自分なりの疑問点や論点を明らかにして討議に備えること。

評価方法

- 授業への参加度・発表：50%、レポート：50%

テキスト

授業内で紹介する。

授業概要

話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、言語事項における、さまざまな言語活動の実際を取り上げる。そのために、本授業では原則、各回にテキストの1章を購読する。最後に、受講者が選んだテーマによる発表を行う。

授業計画

第1回	話す力・聞く力
第2回	書く力
第3回	読む力
第4回	言語文化
第5回	ことばの理解
第6回	音読の力
第7回	コミュニケーションの力
第8回	情報活用力の力
第9回	論理の力
第10回	言葉あそび
第11回	日本語の特色
第12回	メディア・リテラシー
第13回	小学校の言語活動①：発表
第14回	小学校の言語活動②：発表
第15回	小学校の言語活動③：発表

到達目標

小学校における言語活動の多様な側面について理解し、小学校教育の現場における言語活動を組織するための実践的な知識を習得する。

履修上の注意

授業で得た知見を基に教育実践上の言葉の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。

予習・復習

テキスト、参考資料を事前に読み、子どもの言葉に対する関心を深めて授業に臨むこと。

評価方法

授業中の討議（50%）とレポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

岩崎淳ほか編著（2018）『言語活動中心国語概説：小学校教師を目指す人のために』学文社

授業概要

幼稚園の領域「環境」と小学校の教科「生活」及び「理科」の内容との繋がりを意識して「子どもと自然」及び「子どもと科学」という観点から実践的に理解する。具体的には、子どもを取り巻く環境の中でも身近な自然や生活の場、園庭、ビオトープなどを活用しながら、幼児教育での自然環境や科学現象を利用した活動についての実践、教材の開発を体験し、自然に親しみ、季節の移り変わりや私たちの生活との係りなどを考える。また、近年、地域が持つ環境に係る問題の解決には持続可能な社会へ向けた教育（ESD）が重要視されている。したがって、こうした広い視野で自然や科学と子どもの係りについても考えられるよう指導していく。

授業計画

第1回	環境教育の必要性とその進め方	
第2回	環境問題と環境教育のかかわり	
第3回	園庭やビオトープにおける自然環境	
第4回	幼児教育における自然環境・自然素材	
第5回	幼児教育における自然遊びの意義と手法	
第6回	幼児教育における自然遊びの計画と実践	
第7回	幼児教育における飼育・栽培活動の意義と手法	
第8回	幼児教育における飼育・栽培活動の計画と実践	
第9回	幼児教育における自然観察の意義と手法	
第10回	幼児教育における自然観察の計画と実践	
第11回	幼児教育における科学遊びの意義と手法	
第12回	幼児教育における科学遊びの計画と実践	
第13回	植物園や科学館を利用した環境学習体験の計画	
第14回	植物園や科学館を利用した環境学習体験の実践	※校外活動
第15回	環境問題の今日的課題と学習のまとめ	
第16回	レポートの提出	

到達目標

1. 発達に応じた自然との係りの理解や、自然体験・自然遊びなどへの展開を理解し、教材を開発して教育実践することができる。
2. 身近な自然や生活と科学との係りの理解や、科学体験・科学遊びなどへの展開を理解し、教材を開発して教育実践することができる。
3. 環境問題の解決と持続可能な社会へ向けた教育（ESD）との係りを理解し、広い視野で自然と子どもの係りを考えることができる。

履修上の注意

保育・教育者としての役割・ねらいをもって活動に積極的に参加すること。また、各自の指導計画について、内容をまとめてプレゼンテーションを行うため、パワーポイント等のプレゼンテーションソフトの使用に慣れておくこと。

予習・復習

単位修得には、プレゼンテーションや個人レポート作成、教材開発などのために授業以外の自主学習（予習）が必要となる。また、将来教育現場で活用することができるよう、授業内で得た知識・技能を復習することも必要となる。

評価方法

授業への参加状況を教材開発や教育実践への取り組みなど（30%）により評価し、教育現場で教育活動を実践するうえで必要な知識・技能の取得状況をレポート（70%）により評価する。

欠席が1/3を超えた場合は、原則として評価の対象とはしないので充分注意すること。

テキスト

テキスト：幼稚園教育要領（平成29年3月告示 文部科学省）、小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、幼稚園教育要領解説（平成30年3月 文部科学省）

参考書・参考資料等：授業中に適宜資料を配布する。

授業概要

本授業では、算数指導に関わる図形概念に焦点を当て、心理学や数学教育学における先行研究を引き合いに出しながら、数概念や図形概念の形成ならびに指導上の留意点について講義する。まず、心理学、特にピアジェの理論を見ることで、「概念とは何か？」について講義する。そして、数概念や図形概念に関する先行研究を紹介しながら、指導上の留意点を講義する。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	概念とは(1)：概念の内包と外延
第3回	概念とは(2)：抽象化・一般化
第4回	概念とは(3)：ピアジェ理論の概観
第5回	概念とは(4)：数学教育における認識論
第6回	数概念の形成とその支援(1)：整数の意味と計算
第7回	数概念の形成とその支援(2)：小数・分数の意味と計算
第8回	数概念の形成とその支援(3)：量概念の形成
第9回	数概念の形成とその支援(4)：数概念形成に関する指導事例
第10回	図形概念の形成とその支援(1)：図形の構成要素
第11回	図形概念の形成とその支援(2)：図形の包摂関係
第12回	図形概念の形成とその支援(3)：ファン・ヒーレの学習水準理論
第13回	図形概念の形成とその支援(4)：図形概念形成に関する指導事例
第14回	概念形成に関する研究の動向
第15回	本授業のまとめ
第16回	筆記試験

到達目標

- ・概念発達ならびにその指導に関する基本的な知識を習得し、その概要を説明することができる。
- ・指導上の留意点を考慮した指導計画を立案することができる。

履修上の注意

- ・講義の他に、演習を行う場合がある。
- ・授業開始から20分経過後に入室した学生は遅刻とみなす。なお、公共交通機関の遅延による遅刻はその限りではない。2回の遅刻で1回分の欠席とカウントするので、注意すること。

予習・復習

- ・予習：参考資料の通読、レジュメの作成
- ・復習：授業内で行われた議論を整理・理解する

評価方法

- ・授業に対する態度(30%)
- ・レポート・レジュメ(40%)
- ・筆記試験(30%)

テキスト

テキストは特に指定しない。履修者の関心に応じて、適宜資料を配布する。

授業概要

小学校の理科の学習で扱う自然の事物・現象に関して、子どもの素朴概念や科学的概念・自然認識を探る手法を修得することを目標とする。どのような教材、指導方法、指導過程が子どもの科学認識を揺さぶり、教育効果が期待できるのか等について先行研究の文献を基に考え、小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」および「B生命・地球」の双方において指導計画を立てて模擬授業を行うことができるようにする。

授業計画

第1回	オリエンテーション 子どもが持つ素朴概念や科学的概念・自然認識とは何か理解する。
第2回	理科教育、科学教育に関わる文献検索の方法を習得し、科学的概念の形成や授業研究に係わる文献情報を収集する。
第3回	科学的概念の形成以前にもつ子どもの素朴概念とはどのようなものか、文献情報や討論を通じて把握する。
第4回	子どもの素朴概念が修正され、科学的概念が形成されることを、小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」における授業実践事例を通して理解する。
第5回	子どもの素朴概念が修正され、科学的概念が形成されることを、小学校理科内容区分「B生命・地球」における授業実践事例を通して理解する。
第6回	科学的概念や自然認識を揺さぶる授業の「導入」部分の指導計画を作成する。
第7回	科学的概念や自然認識を揺さぶる小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」の授業での「実験・観察、ものづくり」部分の指導計画を作成する。
第8回	科学的概念や自然認識を揺さぶる小学校理科内容区分「B生命・地球」の授業での「実験・観察、体験活動」部分の指導計画を作成する。
第9回	科学的概念や自然認識を揺さぶる授業の「まとめ」部分の指導計画を作成する。
第10回	各自が作成した小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」の指導計画に対して討論・批判的検討から得た情報を基に修正をする。
第11回	各自が作成した小学校理科内容区分「B生命・地球」の指導計画に対して討論・批判的検討から得た情報を基に修正をする。
第12回	小学校理科内容区分「A物質・エネルギー」における模擬授業を実施し、自己評価するとともに、討論・批判的検討から得た情報を基に指導計画を修正する。
第13回	小学校理科内容区分「B生命・地球」における模擬授業を実施し、自己評価するとともに、討論・批判的検討から得た情報を基に指導計画を修正する。
第14回	修正された指導計画について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して指導計画の改善版を完成させる。
第15回	まとめ 本授業での取り組みを振り返り、教育現場での実践と比較しながら今後の授業実践への展望を考える。 ※校外学習

到達目標

- ・子どもがもつ素朴概念と科学的概念を探る研究手法を獲得することができる。
- ・科学的概念・自然認識を揺さぶり、意欲を伸ばす指導法を考えることができる。
- ・理科教育、科学教育に関わる文献や論文の検索の方法を習得し、論文を収集できる。

履修上の注意

教育者としての役割・ねらいをもってグループ活動に積極的に参加すること。また、各自の指導計画について、内容をまとめてプレゼンテーションを行うため、パワーポイント等のプレゼンテーションソフトの使用に慣れておくこと。

予習・復習

単位修得には、プレゼンテーションや個人レポート作成、教材開発などのために授業以外の自主学習（予習）が必要となる。また、将来教育現場で活用することができるよう、授業内で得た知識・技能を復習することも必要となる。

評価方法

授業への参加状況を教材開発や教育実践への取り組みなど（30％）により評価し、教育現場で教育活動を実践するうえで必要な知識・技能の取得状況をレポート（70％）により評価する。

テキスト

テキスト：小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）、
参考書・参考資料等：授業中に適宜資料を配布する。

授業概要

幼児期から児童期の造形表現の発達と教育、理論と実践を往還させながら、幼稚園及び小学校図画工作科における教育実践理論を講義する。幼小の連続性を重視した造形カリキュラムの研究、鑑賞教育と地域社会との連携、諸外国の造形教育について多面的に考察する。学校・家庭・地域社会など様々な芸術教育のあり方について深く学ぶとともに、芸術の教育者として幅広い見識と応用力を身に付けることをねらいとして講義する。

受講生は自ら研究テーマを設定、子どもたちが意欲的な創造活動が展開できる指導法についてグループ討議・発表する。教育現場における課題を析出して、造形表現を中心に実践と理論を結びつけながら考察、授業研究を進める力量を修得できることを目標にする。

授業計画

第 1 回	オリエンテーションー教師の力量と、子どもの造形表現における「気づき」と「見立て」の援助のあり方の関係について理解するー
第 2 回	幼稚園教育と小学校教育の「造形遊び」学習の指導、授業研究、先行研究、国際的な比較研究など事例を基に支援のあり方について考察する。
第 3 回	身近にある自然物や材料、その形や色の特徴などから自分のイメージをもつ造形活動の題材の設定、導入について考察する。
第 4 回	感じ取ったことを話す、聞く、話し合うなどの活動を通して、表し方の変化や特徴などをとらえる学習活動と対話型鑑賞教育について考察する。
第 5 回	幼稚園や小学校、子どものいる施設等での参加型フィールドワークの現状や、表現活動の家庭・地域との連携、共同で行う創造活動について考察する。
第 6 回	諸外国に見られる親しみのある造形表現と子どもの創造性を伸ばす教授支援のあり方を考察する。(アジア・南米・オセアニア・西欧の造形教育など)
第 7 回	我が国や諸外国の自然や地域の人々の生活に結びつきながら継承された伝統的な造形の教材化と教育的意義について考察する。
第 8 回	図画工作科の領域の内容と構成、学習環境とその運営、評価活動のあり方や方法を理解する。
第 9 回	絵や立体、工作に表す活動の授業の構成、展開、評価について理解する。
第 10 回	題材開発にかかわる指導計画や指導案の導入と展開について理解を深める。安全配慮、環境構成の授業のあり方を学び、学習指導案を作成する。
第 11 回	感性と表現に関する領域「表現」と小学校図画工作の接続、小学校他教科との関連について考察する。
第 12 回	造形表現の単元設定を行い、学習指導案を作成する。作成した学習指導案に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。
第 13 回	図画工作科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。作成した学習指導案に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。
第 14 回	作成した単元設定に基づき、幼児観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。
第 15 回	作成した単元設定に基づき、児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議と相互評価を行う。

※学外授業として幼児・児童の作品展鑑賞会及び美術館の鑑賞教育を学ぶことも予定される。

到達目標

- 1 幼児期から児童期の表現の発達を捉え、個に対応した造形活動の指導法について理解する。
- 2 造形教育のあり方について深く学ぶとともに、教育現場における芸術活動の指導計画を立てる。
- 3 子どもの様々な表現方法についての研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用する。

履修上の注意

子どもの造形表現の指導者としての役割・環境・ねらいを具体的に定め、グループ活動に積極的に参加すること。また、授業内で視聴した映像・子どもの造形作品についてのミニレポートに取り組むこと。

評価方法

授業におけるグループ討議の内容（60％）とレポート（40％）で評価。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布。

授業概要

保育現場および小学校の「音楽科」において、子どもたちが意欲的に活動へと向かい、かつ螺旋的な学びに繋がるような遊びの展開方法、指導方法について講義する。講義内では、子どもの音楽的発達とその表現、音楽的理論、技術獲得についても指導していく。同時に保育者、教育者としての感性と技術、知識と応用力を身に付けることをねらいとする。

授業計画

第1回	オリエンテーションー子どもの発達と表現、援助についてー
第2回	音楽教育に関する文献購読と討議
第3回	幼児における音楽教育
第4回	小学校教育における学習の指導とその展開①学習指導要領の理解
第5回	小学校教育における学習の指導とその展開②指導計画の実際
第6回	小学校教育における学習の指導とその展開③模擬実践と考察
第7回	領域「表現」と小学校「音楽科」との接続について
第8回	楽譜の読み方と分析
第9回	保育者・教育者としての感性と技術①音、音楽とその聴取
第10回	保育者・教育者としての感性と技術②楽器の扱い
第11回	保育者・教育者としての感性と技術③声
第12回	指導案の立案
第13回	指導案の実践
第14回	指導案に基づいた実践と振り返り
第15回	授業のまとめ
第16回	レポート課題提出

到達目標

1. 子どもの年齢に応じた発達と表現との関連性をふまえた音楽活動の指導法について理解することができる。
2. 音楽教育のあり方を深く学ぶとともに、教育現場における音楽活動の指導計画を立てることができる。
3. 音楽を用いた教育方法の研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用することができる。

履修上の注意

知識理解、技術の獲得は、日々の積み重ねによって得られるものであるため、積極的かつ継続的な姿勢をもって履修すること。

予習・復習

予習：各講義に向けての準備をしっかりと行い、授業に臨むこと。

復習：授業内で得た知識、技術を確実なものとするために、すぐに復習をすること。

評価方法

授業に臨む準備と取り組み（30%）、指導案等の提出物（30%）、レポート（40%）で総合的に評価する。

テキスト

- ・教科書名：子どものための音楽表現技術 感性と実践力豊かな保育者へ
 - ・著者名：今泉明美、有村さやか（編）
 - ・出版社名：萌文書林
 - ・出版年：2017年（ISBN 978-4-89347-246-5）
- その他、授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布。

授業概要

本講義は、近年の道徳教育の動向を踏まえて、学校教育における道徳の位置とその機能の変容について考察し、新たな道徳授業の開発と実践に向けた条件について検討していく。具体的には、前半部で、道徳の位置づけと機能の変容について、答申や学習指導要領、様々な実践や学校規模での取り組み、諸外国での取り組み等を手がかりに検討していく。後半では、文献報告を通して子どものための哲学教育の基本理念や実践をめぐる諸問題、ケアと民主社会との関係性について議論していく。以上をもとに、これからの道徳教育を成立させるための条件について探究していく。

授業計画

第1回	イントロダクション——ミドルリーダー力量形成における本授業の位置づけと授業のねらい
第2回	道徳教育の質的転換——従来の道徳から「考え、議論する道徳」へ
第3回	問題解決型の道徳授業と理論的背景——プラグマティズムの思想
第4回	道徳教育と他教科との関連——社会科を中心に
第5回	学校教育と「てつがく」教育①——A 小学校を事例として
第6回	学校教育と「てつがく」教育②——P4Cと熟議・サークル対話の関係性
第7回	文献報告①「子どものための哲学」の民主的特性（１）——探究の共同体と民主性
第8回	文献報告②「子どものための哲学」の民主的特性（２）——市民の教育と熟議
第9回	文献報告③子どものための哲学における子どもと幼年期——手法としての哲学劇
第10回	文献報告④実践における探究の共同体（１）——教師のマインド・セットの変容
第11回	文献報告⑤実践における探究の共同体（２）——共同体としての思考と私たち
第12回	文献報告⑥学校での哲学——「てつがく」と学校カリキュラム
第13回	文献報告⑦子どものための哲学の理論的基盤（１）——ケア概念と互恵の関係性
第14回	文献報告⑧子どものための哲学の理論的基盤（２）——ケアと民主社会との接続
第15回	道徳教育再考——これからの道徳教育を成立させるための条件
第16回	道徳教育・てつがく教育に関する課題レポート

到達目標

- ・近年の学校教育における道徳授業の意義と課題について、事例を挙げて説明することができる。
- ・哲学教育に関する文献報告を通して、対話空間を構築することができる。
- ・本授業全体を踏まえて、これからの道徳教育を成立させる条件について説明することができる。

履修上の注意

新学習指導要領や補助教材等は文部科学省ホームページからダウンロードできます。
また、学外での公開授業や研究会に参加することも考慮しておいてください。

予習・復習

参考文献や関連する論文などを読んで見識を深めていってください。文献については、授業の中で適宜紹介します。

評価方法

- ・課題レポート：40%
- ・文献報告：60%

テキスト

参考文献：

- M. R. グレゴリー他（2020）『子どものための哲学教育ハンドブック』東京大学出版会。
小玉重夫（2023）『対話的教育論の探究——子どもの哲学が描く民主的な社会』東京大学出版会。
森田伸子（2021）『哲学から〈てつがく〉へ！——対話する子どもたちとともに』勁草書房。
お茶の水女子大学附属小学校 NPO 法人お茶の水児童教育研究会（2019）『新教科「てつがく」の挑戦——“考え議論する”道徳教育への提言』東洋館出版社。
キャロル・ギリガン（2022）『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』風行社。
キャロル・ギリガン（2023）『抵抗への参加——フェミニストのケアの倫理』晃洋書房。
川本隆史（2005）『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣。
岡野八代（2009）『シティズンシップの政治学〔増補版〕——国民・国家主義批判』白澤社。
ジョアン・C・トロント（2020）『ケアするのは誰か？——新しい民主主義のかたちへ』白澤社。

授業概要

模擬授業の児童役や教師役を体験しながら、その振り返りを通して授業づくりの考え方を学んでいく。特に、前半において各教科の授業から学んだ視点を基盤として、後半では、さらに分析的に授業をとらえていく。授業動画などの発話プロトコルをもとに、児童の理解状態を把握する。そのうえで、綿密な教科書分析と児童の反応を予測した授業設計を行い、学習指導案作成ならびに授業実習を行う。授業の板書や撮影したビデオをもとに、授業について反省的に分析して、次の実践に生かすPDCAサイクルを体得し、将来のミドルリーダーとしての資質を培う。

授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	セッション1：小3理科「物の重さ」教師役と子ども役との対話
第3回	セッション2：小6社会「参勤交代」振り返りを深めるということ
第4回	セッション3：小2算数「かけ算の問題づくり」子ども役になるということ
第5回	セッション4：小2国語「たとえをつかって文を書こう」感情が果たす役割
第6回	セッション5：小4算数「何倍でしょう」模擬授業&検討会をやってみよう
第7回	セッション6：小5社会「身のまわりの情報」検討会の深め方
第8回	セッション7：小4国語「話し合い」模擬授業以外の授業づくりの勉強会
第9回	セッション8：小4音楽「とんび」実際の授業の振り返りに応用するには
第10回	授業動画分析
第11回	教材分析・授業構成・授業実践の位置づけ
第12回	教科書分析演習、学習指導案作成演習
第13回	授業実習1：授業実習の反省的分析
第14回	授業実習2：授業実習の反省的分析
第15回	授業実習3：授業実習の反省的分析
第16回	本授業のまとめ

到達目標

教職課程や教育実習を通して学んだことを振り返り、さらに修得すべき事項を認識して、その部分の学びを深めていく。特に、教材について児童の学びを想定した分析を行い、授業実習については、反省的視点から分析ができるようにする。

履修上の注意

授業で得た知見を基に教育実践上の問題を関連づけ考察する習慣をつけること。授業実習にあたっては、配当学級における児童を観察し、実態に即した授業となるように準備をすること。
※川口市内の小学校において、30時間以上の観察実習・授業実習を行う。

予習・復習

テキスト、参考資料を積極的に読み、授業づくりに対する関心を深めて授業に臨むこと。

評価方法

授業中の討議（50%）と小学校の実習（50%）から総合的に評価する。

テキスト

渡辺貴裕著（2019）『授業づくりの考え方：小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ』くろしお出版
あとは、適宜授業において配布する。

授業概要

本授業の目的は、幼児教育における教育成果を高める保育・教育の要件とその評価法を開発できる力を養成することである。幼児教育の現場における参与観察を通し、理論的観点のみならず実践的臨床的観点から保育・教育の問題を考察していく。各自の問題意識に基づき研究の問いを立て、保育場面で収集した子ども同士や保育者と子どもとのやりとりのエピソード、あるいは保育者による保育・教育実践に関するナラティブ（語り）などを分析する。さらに、得られた知見を実践知として深めていくために模擬授業を行う。

授業計画

第1回	オリエンテーション：本授業の目的と方法の説明、院生各自の問題意識の確認
第2回	幼児教育の現代的問題を探る：問題探求の視点と方法
第3回	幼児教育における理論と実践を考える（1）幼児教育の方法
第4回	幼児教育における理論と実践を考える（2）子どもの主体性を尊重する
第5回	幼稚園における実地研究 （1） 期間：5日間。 （2） 時間：1日8時間（休憩時間を除く）を上限とし、5日間、30時間を確保する。 （3） 内容：参与観察によるフィールド研究を行う。
第6回	
第7回	
第8回	
第9回	
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	分析（1）エピソード分析・ナラティブ分析の応用としての実践及び評価
第14回	分析（2）臨床的問題への応用としての実践及び評価
第15回	まとめ：教育成果を高める方法と評価法の開発に向けて
第16回	レポート提出

到達目標

1. フィールド研究を通して幼稚園での教育成果を高める方法を考えることができる。
2. フィールド研究を通して問題解決への的確な提案ができる。
3. 模擬授業によって実践知を深めることができる。

履修上の注意

フィールド研究や模擬授業に対して、理論面や実践面から考察し、自分の意見をもって積極的に発言することで、専門性を高める努力をしてほしい。各回、自らの教育実践力について省察し、次の回ではさらにその省察を深めるなど、教育実践を含む自己の省察・洞察する習慣を身につけること。

予習・復習

毎回、復習を行い、次回の内容について、参考文献などによる自主予習を行うこと。

評価方法

授業中の発言や積極的参加態度（40%）、幼稚園での参与観察などによる自己評価における省察の深まり及び考察（60%）に基づき総合評価を行う。

テキスト

授業内で、必要な文献等を適宜指示する。

授業概要

小学校の各教科の学習への基礎を培う幼稚園教育と小学校各教科における学習活動を高める教材開発・環境開発の方法について学ぶ。特に学習者の思考を高めることをねらいとした教材開発を受講者各自が行い、模擬授業を通して教材の教育効果の検証や実践的な理解を深める。本授業は、幼児期から児童期の子どもの発達を縦の流れとし、各教科を科目横断的に捉え、理論と実践を往還しながら複数教員による指導を行う。また、環境教育と体験学習、造形教育と教材製作を中心に、指導計画の立案と実施、評価などを行う。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション 講義科目での学修の振り返りと、教材・環境開発を行う上でのこれからの学習計画、受講生の心構えを理解する。
第 2 回	小学校各教科と幼稚園教育の目標と内容、5つの領域（健康、人間関係、言葉、環境、表現）編成とそのねらいと教材・環境の関わりを理解する。
第 3 回	幼児教育とその後の階梯である小学校教育の教科指導について学ぶ。主として幼児教育に関わる保育内容と環境と指導法について考察する。
第 4 回	幼児教育に関わる教材開発や授業研究等、先行研究、国際的な比較研究など事例を基に支援のあり方について考察する。
第 5 回	幼稚園や子どものいる施設等での長期の観察・参加型フィールドワークの現状や分析活動など、保育・教育現場における教材開発の実践について考察する。
第 6 回	グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動のあり方や方法を議論する。
第 7 回	小学校学習指導要領の「総合的な学習の時間」における問題の解決能力と主体的な探究活動について、教材開発の事例をもとに議論する。
第 8 回	「総合的な学習の時間」の横断的・総合的な学習を展開するための理論と教材開発の具体的な方法、環境設定や環境整備等について議論する。
第 9 回	開発題材にかかわる指導計画や指導案の導入と展開について理解を深める。安全配慮、環境教育の授業のあり方を学び、学習指導案を作成する。
第 10 回	自然や身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」と小学校理科の関連について理解する。理科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。
第 11 回	作成した理科の単元設定に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。評価活動のあり方や方法について学ぶ。
第 12 回	感性と表現に関する領域「表現」と小学校図画工作の関連について理解する。図画工作科の単元設定を行い、学習指導案を作成する。
第 13 回	作成した図画工作科の単元設定に基づき、模擬授業についてのグループ討議と相互評価を行う。評価活動のあり方や方法について考察する。
第 14 回	児童観察、教材分析、指導方法、発表評価、教材の開発と授業研究のあり方についてグループ討議、検討する。
第 15 回	地域との連携、教材開発の今後の展望について討議、発表のまとめを行う。

※学外授業として、博物館又は美術館鑑賞教育を行うことも予定される。

到達目標

1. 幼児期から児童期の発達を捉え、学習への基礎を培う教材開発と環境開発の方法を修得することができる。また、学習活動を高める教材開発に必要な科学的概念を修得することができる。
2. 小学校教員としての教材づくり、指導計画の立案と実施、評価を行うことができる。
3. 事例を用いて教材の効果を分析・考察する手法を身につけ、研究や考察を理論と結びつけて自らの教育実践・発表に応用することができる。

履修上の注意

保育・教育者としての役割・環境・ねらいを具体的に定め、グループ活動に積極的に参加すること。自己のグループ活動におけるコミュニケーション力量を省察し、その省察を記録し、次に生かすこと。

予習・復習

毎回の授業内容について予習・復習が必要である。

評価方法

授業における教材開発の内容とレポート（50%）、発表会（50%）で評価する。

テキスト

授業中に適宜指示、参考資料のプリントを配布する。

授業概要

現在、学校で起きているいじめや自殺、不登校について、理論と実践の両面から学ぶ。いじめなどの人権問題、自殺や不登校の対応を海外も参考にしながら探求する。また、いじめや自殺を防ぐための模擬授業体験や、ロールプレイによりカウンセリングをするなども取り入れ、理論と実践の往還による専門知識の獲得を目指すように指導する。本授業は、心理学と教育学を専門とする2名の教員により、各テーマについて複数の視点から分析・考察できるようにする。

授業計画

第1回	オリエンテーション 本演習の目的と方法、及び、受講生の心構えを理解する。
第2回	いじめ・自殺・不登校についての理論
第3回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読（1）人権といじめ
第4回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読（2）人権といじめ・不登校
第5回	いじめ・自殺・人権に関連した文献の講読（3）情念と自殺
第6回	受講生による問題意識の提示
第7回	受講生による問題意識の発表と明確化
第8回	受講生による問題意識の探求と発表
第9回	ロールプレイング（1）カウンセリング体験
第10回	ロールプレイング（2）カウンセラー体験後の考察
第11回	問題行動に対する授業と教材（1）授業方法について
第12回	問題行動に対する授業と教材（2）教材の検討
第13回	問題行動に対する授業と教材（3）模擬授業体験 理論と実践の統合
第14回	問題行動に対する授業と教材（4）模擬授業の考察
第15回	全体のまとめ

到達目標

1. 小学校からいじめをなくすため、人権や情念について理論的に学び、指導法の立案と実施、評価法を研究することができる。
2. 小学校におけるいじめを早期に発見し、対処するための学級経営の実施と評価法を研究することができる。
3. 小学校における自殺・不登校対策を研究することができる。

履修上の注意

講読した文献ごとに要約し、再考する。

ロールプレイやグループ活動における自己のコミュニケーション力量を省察し、その省察を記録し、次時に生かすこと。

評価方法

各回のまとめ、模擬授業、レポート内容から、理論と実践の往還により各自の問題意識が深化されたかにより評価する。各回のまとめ（30%）、模擬授業（30%）、レポート内容（40%）。

テキスト

授業時に指示する。

授業概要

学校・行政・NPO等の地域における子育て支援・保育・教育等への取組みについて、事例検討や見学を通じて、地域連携プロジェクトへむけた具体的な方法論と課題を学んで行く。また子育て支援、幼保小連携、特別なニーズを持った子どもへの保育・教育等について、地域連携プロジェクトを立案・実施・評価する演習を通じて、社会全体で子どもを保育・教育することにむけた専門性を涵養する。

本授業は地域連携において必須となる複数の分野にまたがる専門職間の連携等を想定し、専門分野が異なる研究者が共同で行う。このことにより、複数の視点やニーズに基づいたバイアスの除去や分野間のアコモデーションのあり方の実際を学ぶ。

授業計画

第1回	保育・教育における地域連携の必要性と課題、及び、受講生の心構えを理解する。
第2回	学校・行政・NPO主体の地域連携プロジェクト事例検討・1(子育てサロン)
第3回	学校・行政・NPO主体の地域連携プロジェクト事例検討・2(幼保少連携)
第4回	学校・行政・NPO主体の地域連携プロジェクト事例検討・3(特別なニーズを持った子どもへの保育・教育)
第5回	学校・行政・NPO等への見学・インタビュー
第6回	学校・行政・NPO等への見学・インタビュー報告レポート
第7回	地域連携プロジェクトのためのテーマ抽出
第8回	地域連携プロジェクト計画演習・1 地域における保育・教育ニーズの観点から (教師・保育者としての学校外を含んだ幼児・児童を持つ家庭への支援の視点)
第9回	地域連携プロジェクト計画演習・2 先行するプロジェクトの評価の観点から (教師・保育者としての専門性をどう活用しているか、教育的改善にどう繋がったかの視点)
第10回	地域連携プロジェクト計画演習・3 プロジェクトの妥当性と成果予測の観点から (目的の明確化や妥当性・信頼性の視点、教育的成果を指導計画等にどう活かしていくかという継続性の視点)
第11回	地域連携プロジェクト企画プレゼンテーション
第12回	地域連携プロジェクト実施・1
第13回	地域連携プロジェクト実施・2
第14回	地域連携プロジェクト事後評価
第15回	地域連携プロジェクトの改善点と今後の課題(学校教育との連携の視点から)

到達目標

1. 地域における行政・NPO等の取組みの現状と問題点を知る。
2. 既存のプロジェクトについて、見学・参加し、プロジェクト運営の方法論を知る。
3. プロジェクトを立案・実施・評価するプロセスを通じ、地域連携にむけた教育者としての専門性を養う。
4. 地域のニーズの多様さを知り、複数の分野の専門職が連携することの重要性を理解する。

履修上の注意

授業時間外の学外見学等を行うことがある。

演習科目であることから、主体的かつ積極的に取り組みこと。

授業内で複数回のレポート、プレゼンテーションを課すことがある。

プロジェクトとの計画・実施においては常に「教師・保育者」としての視点を持つこと。

予習・復習

毎回の授業内容について予習・復習が必要である。

評価方法

各演習・実習への取組み(30%)、計画書(30%)・レポート(40%)により評価する。

テキスト

特に定めない。授業内で適宜資料を配布する。

授業概要

理科教育・環境教育の実践研究や授業研究に関する文献及び教材開発の実践事例を収集し、輪読及びその内容についての討論・批判的考察を行う。そして修士論文執筆の心構えと正しい研究方法を身に付けられるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文作成に向けたガイダンスを行い、理科教育及び環境教育等に係わる論文作成の手法を確認する。
第2 ～3回	理科教育に係わる研究の歴史と近年の動向を整理する。文献収集の方向性を明確にする。
第4 ～5回	環境教育に係わる研究の歴史と近年の動向を整理する。文献収集の方向性を明確にする。
第6回	修士論文作成の検討資料を得るため、小学校及び社会教育施設などの教育現場の参観を行う。
第7回	理科教育に係わる文献を収集して整理し、発表・討論を通じて批判的に考察を加え、研究の留意点や研究の手法を探る。
第8 ～9回	文献調査により収集した理科教育に係わる研究の関連実験及び観察を行う。
第10回	環境教育に係わる文献を収集して整理し、発表・討論を通じて批判的に考察を加え、研究の留意点や研究の手法を探る。
第11 ～12回	文献調査により収集した環境教育に係わる研究の関連実験及び観察を行う。
第13 ～14回	理科教育・環境教育に対する学生がもつ問題意識を整理する。また、問題解決に係わる情報を収集するための文献検索を行う。
第15回	検索した文献をもとに、学生がもつ問題意識を修士論文で扱う学術的課題として整理する。

到達目標

1. 理科教育・環境教育に係わる文献や実践事例の収集方法を身に付けることができる。
2. 理科教育・環境教育に係わる文献や実践事例をもとに討論し、批判的に考察することができる。
3. 修士論文を作成するための留意点及び研究方法を理解することができる。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容（50%）、討論への参加状況（30%）、研究への意欲（20%）などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

家族社会学、ジェンダー学にかかわる領域に研究関心をもつ学生を対象に、学生自らが問題意識を高め、研究テーマを明確にし、修士論文作成のための研究計画を作成できるよう指導する。また、修士論文作成に必要な、研究の進め方や論文の書き方、資料の検索やデータ収集の方法など、基礎的な事項について指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション～修士論文作成までの研究の進め方。
第2回	「問題関心」の明確化～自らの「問い」と向き合う。
第3回	「問題関心」から「研究課題」へ～「問題関心」を研究レベルでとらえ直す。
第4回	「研究テーマ」を検討する～テーマのオリジナリティについて検討する。
第5回	論文作成のための基礎的事項の確認～作業リストを作成する。
第6回	先行研究の検討①～参考文献・必要文献を明確にする。
第7回	先行研究の検討②～研究に必要な文献リストを作成する。
第8回	先行研究レビュー①～先行研究の蓄積と知見について整理。
第9回	先行研究レビュー②～レビューをさらにすすめる。
第10回	研究計画書の作成①～「研究課題」と「研究の目的」を明確にする。
第11回	研究計画書の作成②～「問い」と「仮説」を立てる。
第12回	研究計画書の作成③～「研究方法」について検討する。
第13回	研究計画書の作成④～第一次研究計画書に着手。
第14回	研究計画書の作成⑤～第一次研究計画書を完成させる。
第15回	まとめ～立案した研究計画書を発表し、取り組むべき作業課題を明らかにする。

到達目標

1. 自らの問題関心にもとづき、研究テーマを明確にする。
2. 自らの立てた「問い」が学術的に耐えうるものか、オリジナリティはあるかをしっかり見極める。
3. 第一次研究計画書を完成させる。

履修上の注意

研究に向き合う真摯な態度を望む。資料探索や文献講読を積極的にすすめていく態度が何より求められる。文献リストやレビュー・ノートは、必要に応じて絶えずブラッシュ・アップしていくこと。

予習・復習

自分の研究課題と関連する分野の最新の研究成果については、つねにリサーチし、ノートに整理しておくこと。

評価方法

研究に取り組む態度（50%）と課題の達成度・報告内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

研究の進捗状況に応じて、適宜指示する。

授業概要

国内外の文献の輪読と討議を通じて修士論文にむけた研究テーマを明確にする。また各文献の研究手法についての妥当性・信頼性を検討しながら、仮説検証型の研究に耐え得る社会調査法、統計法の基礎的な能力を養い、科学的な根拠に基づく修士論文研究作成にむけた方法論を身に着ける。

授業計画

第1回	関心のあるテーマの発表と、修士論文への妥当性の検討
第2回	関心のあるテーマについての文献講読と討議・1 各種データベース利用を基礎から学び、各自が文献を精読し内容を発表・討議することで、「興味関心」を「具体的な研究目的」へと接続させるための基礎となる力を養う。
第3回	関心のあるテーマについての文献講読と討議・2
第4回	研究テーマの設定 2回の文献講読によって得られた知見を基に、研究テーマにたいする視点を焦点化し、研究のおおよその概念的な枠組みを得る。
第5回	研究の目的および仮説の設定 研究の具体的な目的を明文化し、検証すべき仮説を明らかにしながら、具体的な方法を検討する。
第6回	研究テーマに関する先行研究の収集と要約・1 先行研究を収集・要約・検討することで、自身の研究の必要性を再検討するとともに、より妥当性の高い目的・仮説の設定にむけた修整を行う。
第7回	研究テーマに関する先行研究の収集と要約・2
第8回	先行研究における研究方法の考察・1(社会調査法を中心に) 定量的・定性的調査それぞれにおいて、当該テーマに関わる先行研究の調査法のあり方を精査し、より妥当性・信頼性の高い方法論のあり方を探る。
第9回	先行研究における研究方法の考察・2(統計法を中心に) 科学的なエビデンスに基づいた研究を目指し、クロス集計等の基礎を確認するとともに、多変量解析等のより発展的な手法の実践を学ぶ。
第10回	研究方法の検討と作業仮説の設定・1 第9回までの内容を踏まえ、具体的な調査方法を検討するとともに、仮説検証にむけて積み上げるべき作業仮説と結果の予測を行う。
第11回	研究方法の検討と作業仮説の設定・2
第12回	研究計画書の作成・1 第11回までの内容を踏まえ、詳細な研究方法に加え、調査票等の素案と、結果予測・成果予測までを加えた研究計画を作成する。
第13回	研究計画書の作成・2
第14回	研究計画書のプレゼンテーションおよび討議 各自の研究計画をプレゼンテーションし、相互の問題点等を洗い出しながら、計画を洗練させることを目指す。
第15回	プレ調査と研究スケジュールの検討

到達目標

1. 修士論文にむけた研究テーマを見出す。
2. 質的・量的な社会調査法および統計法を取得する。
3. 修士論文にむけた研究計画を立案する。

履修上の注意

文献講読や討議等について、自分の研究テーマとの関連に関わらず積極的に参加すること。EXCEL,SPSS等のソフトウェアを使用する。慣れていない場合、操作に習熟する様に努力すること。

個別に指示した参考文献・書籍等については必ず目を通すこと。

評価方法

文献講読、討議内容、研究計画書等から総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。毎週文献・資料を配布する。

授業概要

主に発達障害を題材として、幅広く国内外の文献を輪読する。また、それらの文献を参考にしつつ、修士論文の遂行に必要な研究方法や分析方法を学び、研究課題に対し適切な研究方法や分析方法を選択することで、計画的に研究に取り組むための力を養う。

授業計画

第1回	オリエンテーション 発達障害研究について理解する
第2回	発達障害に関する問題意識とキーワードの明確化、参考文献の検索を行う
第3回	参考文献の検討および整理の仕方について学ぶ
第4回	文献から文献をたどって、発達障害に関する問題意識をより深化させる
第5回	発達障害に関する問題の整理と研究テーマの明確化を行う
第6回	研究テーマに関する文献の整理と研究方法の検討を行う
第7回	研究計画の作成および研究ノートを作成を行う
第8回	研究計画に関する文献の整理と仮説の検討を行う
第9回	研究計画に関する文献の整理とデータ内容の検討を行う
第10回	研究計画に関する文献の整理と対象者の検討を行う
第11回	研究計画に関する文献の整理とデータ収集方法の検討を行う
第12回	参考文献をもとに、研究計画に関して再検討し、必要に応じて修正する
第13回	発達障害研究における修士論文の位置づけを理解し、研究計画を作成する
第14回	研究テーマと研究計画を確定させる
第15回	まとめ 教育課題研究Ⅱに向けて整理する

到達目標

1. 発達障害に関する問題意識を高め、研究テーマを明確にする。
2. 基礎文献を踏まえた独創的な研究計画を作成する。
3. 修士論文に必要な独創的研究を遂行するための基礎的な力を形成する。

履修上の注意

- ・適宜、研究経過を研究ノートにまとめること。
- ・日頃から、テーマとしている問題について、文献を収集し、後で振り返りやすいように整理すること。

評価方法

発達障害への問題意識が明確化されたか、独創性のある研究計画となっているかにより評価する(100%)。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

発達心理学、教育心理学および教授・学習心理学の分野において、国内外問わず先行研究のレビューを中心に、現状と課題を整理する。併せて、心理学の研究として必要な研究手法や分析方法を理解する。自らリサーチクエスチョンを設定し、研究の内容に沿った検証方法を検討し、研究計画を立てられるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文作成プロセスに関するガイダンス
第2回	2年間のカリキュラムと見通し
第3回	研究テーマの検討（1）：研究関心を確認する
第4回	研究テーマの検討（2）：課題を探索する
第5回	研究テーマの検討（3）：課題を特定する
第6回	学術研究データベースの利用方法と論文検索方法を学ぶ
第7回	研究テーマに関する学術論文の検索と収集
第8回	研究テーマに関する学術論文の発表と議論（1）：発達心理学の領域から
第9回	研究テーマに関する学術論文の発表と議論（2）：教育心理学の領域から
第10回	研究テーマに関する学術論文の発表と議論（3）：先行研究で明らかになっていることを整理する
第11回	研究テーマに関する学術論文の発表と議論（4）：先行研究で課題となっていることを見いだす
第12回	研究テーマに関する学術論文の発表と議論（5）：オリジナルな研究を構想する
第13回	研究テーマの明確化
第14回	研究計画の作成
第15回	まとめ：教育課題研究Ⅱに向けて整理する

到達目標

1. 自らの興味・関心について心理学的な背景から考察することができる。
2. 自身の興味・関心に沿った先行研究を探し、批判的に検討することができる。
3. 自身の研究テーマを明確にし、研究計画を作成することができる。

履修上の注意

基礎的な心理・統計学の知識については授業の中でも説明するが、自らも書籍などを読み、学習することが望ましい。

自身の研究に向き合う時間を十分にとり、主体的、積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：自身の研究テーマに関連する文献を幅広く探し、読み込むこと。

復習：発表や議論を踏まえ、自身の考えや研究内容を整理すること。

評価方法

授業内の発表、文献報告：50%

研究計画書：50%

テキスト

テキストは特に指定しない。

個々人の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

体育科教育学に関する修士論文を執筆する大学院生を対象とし、研究方法、授業実践方法、分析・検証方法、論文の執筆方法について指導する。修士論文の執筆に向け、体育科教育学についての研究テーマ設定・研究スケジュール作成を目的とし、先行研究・文献レビューの指導を通して、自身のリサーチクエストの立ち位置を明確化することにより、研究計画を立てられるように指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：修士論文執筆に向けて
第2回	修士論文執筆計画作成：2年間のスケジュール構成
第3回	研究テーマの検討（1）自身の研究関心の確認
第4回	研究テーマの検討（2）研究課題から示される「知見」の学術的意義に関する検討
第5回	研究テーマの検討（3）研究課題（リサーチクエスト）の特定
第6回	先行研究・文献検索・先行研究レビュー方法の学習
第7回	研究テーマ（リサーチクエスト）に関する先行研究・文献検索、収集、レビューの作成
第8回	研究テーマ（リサーチクエスト）に関する先行研究レビューの発表
第9回	研究計画の作成① 授業実践計画の検討
第10回	研究計画の作成② 授業実践後の検証方法の検討（収集するデータの検討）
第11回	研究計画の作成③ 2年間のスケジュールの検討（予備検証授業、本検証授業の時期を含む）
第12回	研究計画の発表：各自の研究計画の発表・討議
第13回	研究計画の修正① 予備検証授業計画の確立
第14回	研究計画の修正② 予備検証授業の検証方法（データ分析方法）の確立
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅱにむけて

到達目標

○修士論文作成にむけた研究テーマ（リサーチクエスト）を見出すことができる。
 ○自身の研究テーマ（リサーチクエスト）を明確にし、修士論文作成にむけた研究計画を立案することができる。
 ○先行研究レビューから、自身の研究テーマ（リサーチクエスト）についてのオリジナリティ・学術的意義を明確にすることができる。

履修上の注意

○体育科教育学分野の研究を行うにあたり、子どもの発達段階を踏まえた研究計画立案ができるよう、今までの学びを振り返ることが必要である。
 ○研究計画の立案に際しては、必要に応じて実技演習を伴う場合がある。

予習・復習

○自身の研究課題の追求のため、日々の生活の中で、意図的な研究活動時間の確保が必要である。

評価方法

次のように評価する。

- ①授業実践計画・予備検証授業計画（50%）、
- ②先行研究レビュー・発表内容・討議内容（50%）

テキスト

・文部科学省「小学校学習指導要領解説体育編」東洋館出版社,2018

授業概要

発達心理学、発達臨床心理学に関する文献のレビューを通して、先行研究の成果と今後の課題を整理する。併せて、先行研究の研究方法について検討しながら、心理学における研究法や分析方法を理解する。修士論文執筆に向けて各自の研究テーマとそれに合った研究法を探索し、研究計画を立てられるよう指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：修士論文に求められるもの／執筆に向けた今後の進め方
第2回	関心のあるテーマについての発表と関連文献の検索方法を学ぶ
第3回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議①：先行研究の成果
第4回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議②：先行研究への批判
第5回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議③：先行研究の課題
第6回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議④：先行研究の周辺論文との関連性
第7回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議⑤：研究方法の検討
第8回	研究テーマの検討①：問題意識の確認
第9回	研究テーマの検討②：先行研究の研究成果と課題の整理
第10回	研究テーマの検討③：各先行研究の関連性と自分のテーマへの流れ
第11回	研究テーマの検討④：研究のオリジナリティ
第12回	研究計画書の作成①：研究テーマの絞り込み
第13回	研究計画書の作成②：方法と分析の方向性の決定
第14回	研究計画書の作成③：発表と討議による問題点の確認
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅱにむけて

到達目標

1. リサーチクエッションを探索し、理論と文献と照らし合わせて検討できる。
2. 関心のあるテーマの先行研究の探し、要点と課題について検討できる。
3. 自分の研究テーマを明確にし、研究計画書を作成できる。

履修上の注意

文献講読や討議などについて、関連文献にあたるなどして積極的に参加すること。
心理学の研究法・統計手法については、関連書籍などを読んで事前に学習することが望ましい。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探索する時間を持つこと。

評価方法

文献講読、討議内容、研究計画書などから総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

音楽分野における先行研究と現代における諸問題について理解、整理すると共に、その研究方法や分析方法について理解するための指導を行う。修士論文執筆に向けて各自の研究テーマとそれに合った研究方法を探索し、研究計画を立てる。また、各自の研究内容に応じた文献資料や楽譜の扱い方について議論する。

授業計画

第1回	修士論文作成に向けてのガイダンス
第2回	学術研究データベースの利用方法と論文検索方法
第3回	研究に関連する先行研究の収集
第4回	研究への興味関心の確認と討議
第5回	研究テーマに関連する文献講読と討議① 研究内容の整理
第6回	研究テーマに関連する文献講読と討議② 研究方法や分析方法についての検討
第7回	研究テーマに関連する文献講読と討議③ 研究の諸課題についての検討
第8回	研究テーマに関連する文献講読と討議④ 文献、楽譜、資料の扱い方について
第9回	研究テーマに関連する文献講読と討議⑤ 研究のオリジナリティについて
第10回	研究テーマと方向性についての検討
第11回	研究計画の検討① 研究課題と目的の明確化
第12回	研究計画の検討② 研究課題に対する仮説
第13回	研究計画の検討③ 研究方法および分析方法の方向性について
第14回	研究計画の検討④ 研究計画書の作成
第15回	まとめ：教育課題研究Ⅱに向けて

到達目標

1. 自身の興味・関心について音楽的な背景から理解、考察することができる。
2. 自身の興味・関心に沿った先行研究を探し、批判的に検討することができる。
3. 自身に研究テーマを明確にし、研究計画を作成することができる。

履修上の注意

自身の研究に関連する文献、資料を積極的に検索し、クリティカルに読解する力が求められる。

予習・復習

予習：文献講読や討議等において、積極的に文献探索をし、十分な準備をして参加すること。
 復習：自身の考えや研究内容を熟考、整理する時間を設け、自主学習に努めること。

評価方法

課題発表と報告 50%、研究計画書 50%から総合的に評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。
 各自の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

人文社会教育に関する修士論文を執筆する大学院生を対象とし、研究や論文の作法について指導する。修士論文に関する研究の研究計画書を作成することを目的とし、同時に、研究や論文の作法に関する文献を輪読し、自己の関心のある研究分野ではどのようなになっているのか具体的に探究していく。

授業計画

第1回	イントロダクション——研究計画書の作成方法
第2回	論文の条件とは何か——理論解説・実践報告・主義主張・調査研究・教材研究の克服
第3回	研究論文の目的と特性①——なぜ論じるのか：先行研究の整理とオリジナリティ
第4回	研究論文の目的と特性②——書きたい論文と書くべき論文の峻別
第5回	論文の方法論①——何を、どのように論じるのか：規範研究・開発研究・実証研究
第6回	論文の方法論②——これまでの論文の傾向の把握と新たな展開：先行研究の批判的検討
第7回	研究計画書の発表・共有・共同推敲①——研究テーマと問いの設定
第8回	規範的・原理的研究①——研究のプロセスと論文の組み立て
第9回	規範的・原理的研究②——国内及び海外研究誌の動向
第10回	開発的・実践的研究①——研究のプロセスと論文の組み立て
第11回	研究計画書の発表・共有・共同推敲②——研究対象・方法の設定及び先行研究の整理
第12回	開発的・実践的研究②——国内及び海外研究誌の動向
第13回	実証的・経験的研究①——研究のプロセスと論文の組み立て
第14回	実証的・経験的研究②——国内及び海外研究誌の動向
第15回	研究計画書の発表・共有・共同推敲③——研究の意義と限界及び今後の研究計画の明確化

到達目標

1. 自らの研究課題を明確にし、研究計画書を作成することができる。
2. A4 一枚・10 分以内で調査内容を説明することができる。
3. 論文と非論文の違いを意識し、自らの関心のある研究分野の傾向と課題を把握することができる。
4. 自らの関心のある研究分野の対象と方法を明確化し、研究の意義と限界を示すことができる。

履修上の注意

教育課題研究は、修士論文執筆に向けた論文指導のための授業である。教科教育（社会科教育）をはじめとした人文社会教育に関する論文執筆者を対象とする。教育課題研究Ⅰでは、基本的には、文献報告と自己の研究課題の探究（研究計画書の作成）を並行して進めていく。修士論文は、各自の関心に沿って行われるべきではあるが、「終わり」のある研究であることと「他者」に関かれた研究であることを念頭において研究を進めてほしい。また、審査基準を鑑みて研究を進めていくとともに、個々の関心は異なるかもしれないが、仲間と共に協同的に研究を進めていくことを前提とする。

予習・復習

研究テーマの領域や周辺領域に関するハンドブックや事典、文献を参考にしながら、テーマや問いを焦点化していただきます。文献については、指導の中で適宜紹介します。

評価方法

- ・研究計画書：50%
- ・授業内の発表・文献報告：50%

テキスト

参考文献：草原和博・溝口和宏・桑原敏典（2015）『社会科教育学研究法ハンドブック』明治図書。
 秋田喜代美・藤江康彦（2021）『これからの教師研究～20の事例にみる教師研究方法論～』東京図書。
 関口靖広（2013）『教育研究のための質的研究法講座』北大路書房。
 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社。

授業概要

教育社会学・障害学に関する国内外の文献レビューを行い、自身の関心のあるテーマについての問題意識を高め、先行研究の成果と課題を整理し、研究テーマを明確にする。そのために、今日的な学校教育の課題を捉え、幅広く国内外の文献の購読や資料の検索、データ収集の方法など、研究方法や分析方法を理解する。そして、修士論文作成に向けた研究計画を作成していく。

授業計画

第1回	イントロダクション 研究計画書の作成に向けて
第2回	研究テーマについての発表・討議／調査・分析の妥当性
第3回	修士論文の構成・調査倫理・質的調査へのアプローチ
第4回	質的調査法と分析視角①
第5回	質的調査法と分析視角②
第6回	文献購読と討議①
第7回	文献購読と討議②
第8回	研究テーマの再設定
第9回	研究テーマの先行研究の収集
第10回	研究計画書の作成① 研究テーマと研究目的の明確化
第11回	研究計画書の作成② 先行研究の整理
第12回	研究計画書の作成③ フィールドノーツのまとめ方
第13回	研究計画書の作成④ 分析視角
第14回	研究計画書の作成⑤ 研究計画の構想
第15回	まとめ 教育課題研究Ⅱに向けて〈プレ調査（フィールドワーク）の計画〉

到達目標

- ・修士論文執筆に向けて自らの問題関心に基つき、研究テーマを明確にすることができる。
- ・質的調査法の調査倫理を理解し、プレ調査に向けた研究計画を作成することができる。
- ・研究テーマの先行研究を探し、要点と課題について検討することができる。

履修上の注意

- ・文献購読や資料収集を積極的に進めていき、自分の研究テーマを明確化させていくこと。
- ・テーマの異なる他者との議論を通して相対的・批判的な思考を養っていくこと。

予習・復習

- ・自身の研究テーマに関する資料を積極的に収集すること。
- ・プレ調査に入る前に、質的調査法に関する知識を身につけること。

評価方法

報告内容と討議内容などから総合的に評価する（100%）。

テキスト

各自の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

発達心理学や、保育・教育の実践に関する国内外の文献レビューを幅広く行い、自身の関心のあるテーマについて、先行研究の成果と課題を整理する。併せて、心理学の研究として必要な研究手法や分析方法を理解する。修士論文執筆に向けて各自の研究テーマを明確にし、研究計画を作成する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：修士論文作成までの研究の進め方
第2回	関心のあるテーマについての発表
第3回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議①：先行研究の成果
第4回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議②：先行研究への批判
第5回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議③：先行研究の課題
第6回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議④：先行研究の周辺論文との関連性
第7回	関心のあるテーマに関する文献講読と討議⑤：研究方法の検討
第8回	研究テーマの検討①：問題意識の確認
第9回	研究テーマの検討②：先行研究の成果と課題の整理
第10回	研究テーマの検討③：各先行研究の関連性と自分のテーマへの流れ
第11回	研究テーマの検討④：研究のオリジナリティ
第12回	研究計画の作成①：研究テーマの絞り込み
第13回	研究計画の作成②：方法と分析の方向性の決定
第14回	研究計画の作成③：発表と討議による問題点の確認
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅱにむけて

到達目標

1. 関心のあるテーマについて先行研究を探し、現状と課題について検討できる。
2. 研究テーマを明確にし、リサーチクエスションを立てる。
3. 研究計画を作成する。

履修上の注意

文献講読や討議などについて、関連文献にあたるなどして積極的に参加すること。心理学の研究法・統計手法については、関連書籍などを読んで事前に学習することが望ましい。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探求する時間を持つこと。

評価方法

研究に取り組む態度（50%）と課題の達成度・報告内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

保育・幼児教育実践に研究関心を持つ学生を対象として、国内外の文献を批判的に考察することから研究テーマとなる問いを定め、修士論文執筆に向けた研究計画を作成していく。学術論文の読み方や書き方をはじめとして、レジュメの作成の仕方、計画の立て方、研究方法や分析方法など、研究における基礎について指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション 保育・幼児教育の実践と研究について
第2回	学術論文の仕組み 論文の構成や基礎知識、論文の検索方法
第3回	保育・幼児教育における課題について
第4回	先行研究の収集
第5回	問題の整理と問いの焦点化
第6回	研究方法の検討
第7回	研究計画の作成 長期計画と短期計画
第8回	先行研究の整理と文献リストの作成について
第9回	問いに関連する国内外の文献の輪読① 研究分野の把握
第10回	問いに関連する国内外の文献の輪読② 課題の発見
第11回	問いに関連する国内外の文献の輪読③ 問いの明文化
第12回	文献レビューの作成① 研究テーマに関する3本の論文を読み解く
第13回	文献レビューの作成② 新たに3本の論文に関連付けながら読み解き、成果をまとめる
第14回	研究分野における自身の研究の立ち位置を理解し、研究計画を精錬する
第15回	まとめ 教育課題研究Ⅱに向けて整理する

到達目標

1. 保育・幼児教育に関する研究のために自らの「問い」を設定する。
2. 学術的な研究の基礎とその意味を理解する。
3. 修士論文執筆に向けて、幅広い知識を身につける。

履修上の注意

保育・幼児教育実践に関する基本的知識があることを前提として進める。保育・幼児教育実践や研究テーマに関する知的好奇心、文献に対する丁寧な読解や批判的思考、積極的な参加が求められる。さまざまな文献に触れる際に浮かんだ疑問や意見などを書き留め、文献やノートを適切に整理すること。学生の関心に応じて、学外の保育施設の保育実践を観察したり、また、学外のイベント（学会や研究会など）に参加し、最先端の研究について学んだりすることもある。

予習・復習

予習：研究テーマや問いに関連する情報に向けてアンテナを張り、情報を収集・整理すること。

復習：授業での学びを復習しながら、自身の設定した研究テーマを問い直す作業を行うこと。

評価方法

- ・研究計画書（50%）、授業内の発表や報告（50%）

テキスト

受講生の研究関心に応じて適宜紹介する。

授業概要

各自の授業実践に関する問題意識に基づき、基礎文献の講読、大学院生同士の議論を踏まえ、「問題意識」を精緻化し、「課題意識」の明確化と「研究計画」の作成を図る。そして、授業実践研究に関する論文で独創性を発揮できる研究姿勢の基礎を体得した上で、修士論文の性格を自覚した論文執筆の心構えを身につける。

授業計画

第1回	授業実践の省察：授業実践に関する「問題意識」を発表し合う。
第2回	授業記録の分析①：過去の特徴的な授業記録を読み合う。
第3回	授業記録の分析②：授業記録を取り上げた参考文献を読み合う。
第4回	授業記録の分析③：授業記録に関する「問題意識」を捉え直す。
第5回	参考文献の収集①：「問題意識」に関連した参考文献を集める。
第6回	参考文献の収集②：「問題意識」に関連した参考文献を集める。
第7回	参考文献の講読①：「問題意識」に関連した参考文献を読み合う。
第8回	参考文献の講読②：「問題意識」に関連した参考文献を読み合う。
第9回	参考文献の講読③：「問題意識」に関連した参考文献を読み合う。
第10回	参考文献の整理①：「問題意識」と参考文献との関係をまとめる。
第11回	参考文献の整理②：「問題意識」と参考文献との関係をまとめる。
第12回	論文題目の作成①：論文のテーマとなる「課題意識」を発表し合う。
第13回	論文題目の作成②：研究テーマを意識した論文題目を立てる。
第14回	研究計画の作成①：論文題目をもとに研究の見通しを発表し合う。
第15回	研究計画の作成②：研究テーマを意識した研究計画を立てる。

到達目標

自分の「問題意識」を精緻化し、「課題意識」を明確化できるような「研究計画」に従って、独創性を発揮した修士論文の完成をめざして研究に取り組む。

履修上の注意

修士論文の独創性は、執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けるために、自分なりの研究ノートや文献目録づくりを工夫する。

予習・復習

授業における研究討議への積極的な参加が求められるので、あらかじめ準備をしておく。

評価方法

研究討議への積極的な参加（50%）、各回に提出する研究経過のレポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

劇遊び、ごっこ遊びの実践、保育史など保育に関する幅広い文献に触れ討議を行うなかで、研究に必要な批判的思考と保育に関する研究の方法と資料の探し方について学び、修士論文のテーマを決定する。テーマについての先行研究の読み込みを進めつつ、仮説を設定し研究計画を立てる。

授業計画

第1回	修士論文作成プロセスに関するガイダンス
第2回	2年間の研究計画を立てる
第3回	先行研究の検討(1): 保育内容についての実践研究(劇遊び・ごっこ遊び)
第4回	先行研究の検討(2): 保育環境についての研究(自然)
第5回	先行研究の検討(3): 保育環境についての研究(園舎)
第6回	学術研究データベースの利用方法と論文検索方法
第7回	研究の方法(1) 質的研究
第8回	研究の方法(2) 量的研究
第9回	発表: 研究テーマについての研究の動向(1) 質的研究
第10回	発表: 研究テーマについての研究の動向(2) 量的研究
第11回	研究テーマとフィールド(保育所見学)
第12回	発表: 研究計画の検討① 研究方法の妥当性
第13回	研究のオリジナリティ(先行研究との違い)
第14回	発表: 研究計画について
第15回	まとめ: 教育課題研究Ⅱに向けての整理と準備

到達目標

1. 自らの興味・関心について保育の専門的知識を背景として考察することができる。
2. 先行研究を探し、批判的に検討することができる。
3. 自身の研究テーマを明確にし、研究計画を作成することができる。
4. 自身の研究テーマと研究方法について、分かりやすく説明できる。

履修上の注意

自ら積極的に文献を探し、読解と探究をすることが望ましい。
好奇心と批判的思考を持って討議に参加するよう心掛ける。

予習・復習

予習: 研究テーマに関連する文献を読解し、自分なりの考えをまとめておく。
復習: 発表や議論を踏まえ考えを整理する。自身の研究テーマにつながる資料をさらに探索する。

評価方法

授業内の発表、文献報告: 50%
研究計画書: 50%

テキスト

資料は必要に応じて授業内で配布する。
各人の研究テーマに沿って、文献等を紹介する。

授業概要

本演習では、算数・数学教育に関する修士論文のテーマを明確にするため、国内外の文献の購読を行い、先行研究のレビューの方法を指導する。具体的に、算数・数学教育の研究領域の中から関心のあるテーマを選び、それに関する先行研究の収集を行い、レビューを行うことで、修士論文における研究上の目的を明らかにする。その際、自身の研究の新規性や有用性などが説明できるよう、指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：算数・数学教育における研究領域
第2回	研究テーマの検討①：自己の経験の省察
第3回	研究テーマの検討②：国内外のハンドブックの検討
第4回	研究テーマの検討③：暫定的な研究テーマの決定
第5回	先行研究の検索方法
第6回	先行研究のレビュー方法：ナラティブレビューとシステムティックレビュー
第7回	システムティックレビューの実施①：問題の所在の検討
第8回	システムティックレビューの実施②：レビューの観点の検討
第9回	システムティックレビューの実施③：調査の対象の検討
第10回	システムティックレビューの実施④：調査の方法の検討
第11回	システムティックレビューの実施⑤：先行研究群の分析
第12回	システムティックレビューの実施⑥：考察の検討
第13回	システムティックレビューの論文執筆①：論文執筆の方法
第14回	システムティックレビューの論文執筆②：草稿の確認と修正
第15回	まとめ：修士論文のテーマの再検討

到達目標

- ・国内外における算数・数学教育の先行研究を購読し、その内容を理解することができる。
- ・文献検索の方法を理解し、関心のあるテーマの先行文献を見つけることができる。
- ・修士論文におけるテーマの新規性や有用性などについて、説明することができる。

履修上の注意

- ・修士論文を書き上げるためには、論理的に文章を書くことが求められる。必要に応じて、次の書籍を参照されたい。

本多勝一(2015). 新版 日本語の作文技術. 朝日新聞出版.

予習・復習

予習：各回のテーマに応じたレジュメを作成する。

復習：授業内で受けた指摘をまとめるとともに、次回以降の授業に向けて改善を行う。

評価方法

- ・研究テーマ(30%)、授業内の発表・レジュメ(40%)、作成したレビュー論文(30%)で評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。履修者の関心に応じて、適宜資料を配布する。また、必要に応じて、下記の参考文献を参照されたい。

中原忠男(編)(2001). 算数・数学科重要用語 300 の基礎知識. 明治図書.

日本教科教育学会(編)(2017). 教科教育研究ハンドブック：今日から役立つ研究手引き. 教育出版.

日本数学教育学会(編)(2011). 数学教育学研究ハンドブック. 東洋館出版社.

日本数学教育学会(編)(2018). 算数教育指導用語辞典〔第五版〕. 教育出版.

日本数学教育学会(編)(2021). 算数・数学 授業研究ハンドブック. 東洋館出版社.

全国数学教育学会(編)(2024). 数学教育学の軌跡と展望：研究のためのハンドブック. ナカニシヤ出版.

授業概要

自身がこれまで行ってきた研究を振り返り、その中で浮かび上がってくる今後の研究課題を理科教育・環境教育の既往文献等を通して明らかにする。そして、理科教育・環境教育の今日的課題を把握するとともに、実践研究の方法を修得し、修士論文の研究テーマの決定、研究計画の作成ができるよう指導する。

授業計画

第1～2回	自身が行ってきた研究の概要を示しながら成果と問題点を討論して再確認し、修士論文でのその位置づけ及び研究の方向性を探る。
第3～4回	自身が行ってきた研究の手法を既往研究と比較しながら討論し、修士論文での研究方法の方向性を探る。
第5回	研究テーマの検討資料を得るため、小学校及び社会教育施設などの教育現場の参観を行う。
第6回	既往研究から整理された学術的課題について、その基になった自身の問題意識や文献情報を示しながら発表・討論し、研究テーマを検討する。
第7回	各自が考えた研究テーマに対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に研究テーマを再考する。
第8回	各自が再考した研究テーマについて、その基になった自身のもつ課題や文献情報を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに研究テーマを決定する。
第9回	研究テーマに対して、文献に基づく根拠をもった研究目的を示しながら発表・討論し、研究計画を検討する。
第10回	各自が考えた研究計画に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に研究計画を再考する。
第11回	各自が再考した研究計画に対して、再修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得られた情報を基に研究計画の精緻化を図る。
第12回	再修正された研究計画について、文献情報をもとに整理・確認して研究計画を決定する。
第13回	研究テーマ・研究計画及び討論・批判的検討から得られた情報を基に論文題目の原案を作成する。
第14回	各自が考えた論文題目の原案に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に論文題目の原案を決定する。
第15回	論文題目の原案、研究テーマ、研究計画の係わりが適切であるかどうか検討する。討論・批判的検討から得た情報を基にそれぞれを確定する。

到達目標

1. 理科教育・環境教育に係わる既往文献や実践事例を通して研究課題を明らかにすることができる。
2. 理科教育・環境教育に係わる実践研究の方法を修得することができる。
3. 修士論文の研究テーマを決定し、研究計画を作成することができる。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容（50%）、討論への参加状況（30%）、研究への意欲（20%）などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

教育課題研究Ⅰにおける研究計画をふまえ、論文題目を決定し、研究テーマに応じた研究方法を検討する。修論に必要な調査が実施できるよう、フィールドワーク、量的調査、質的調査等の各種調査方法について学ぶ。さらに本調査へのトレーニングとして、実際にプレ調査を実施し、調査計画書の作成からデータ分析の方法と考察までを経験する。それら研究の進捗状況を確認しながら、第1回修士論文中間報告会の準備ができるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文題目の検討～「研究計画書」にもとづき、修士論文の題目を検討する。
第2回	研究方法の検討～研究方法について具体化する。
第3回	調査方法の検討～調査方法について学ぶ。
第4回	調査計画書の作成①～先行調査レビューと調査方法を検討する。
第5回	調査計画書の作成②～調査の目的、方法、リサーチクエスチョンを明確にする。
第6回	調査の準備～調査フィールドの選定、調査対象者の検討、調査票の作成など。
第7回	調査票の作成～調査票を確定する。
第8回	プレ調査の実施①～調査の進捗具合を報告する。
第9回	プレ調査の実施②～データ整理とデータクリーニング。
第10回	プレ調査の実施③～データの分析方法の検討。
第11回	プレ調査の実施④～結果の分析と考察。
第12回	プレ調査結果の報告～修士論文における調査の位置づけを確認する。
第13回	修士論文の構想①～論文全体の構成、草立てを検討する。
第14回	修士論文の構想②～目次を作成する。
第15回	第1回修士論文中間報告会に向けて～発表原稿を準備し、プレ報告会を行う。

到達目標

1. 教育研究課題Ⅰで作成した研究計画書を具体化していくために必要な知識やスキルを習得する。
2. 調査に関する知識や技法を学び、次年度に本調査が実施できるようにする。
3. 第1回修士論文中間報告会に向けた準備をする。

履修上の注意

論文課題に関連する資料や文献を積極的に探索する態度が求められる。調査には真摯な態度で臨むことが求められる。社会調査の方法や心構え、さらには調査対象者へのルールやマナーなど、しっかりと学ぶことを課す。

予習・復習

自分の研究課題と関連する分野の最新の研究成果については、つねにリサーチし、ノートに整理しておくこと。

評価方法

研究に取り組む態度（50%）と課題の達成度・報告内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

研究の進捗状況に応じて、適宜指示する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで立案した研究計画に基づき、プレ調査・本調査の実施およびデータ分析を行い、修士論文中間報告会における質の高い報告を目指す。問題解決のための具体的な提言に向けた科学的なエビデンスを得ることを目的に、妥当性・信頼性を担保しながら調査を進めることができるように指導する。

授業計画

第1回	研究計画の再検討 目的と作業仮説との整合性等を含め、研究計画の最終的なチェックと修整を行いながら、より妥当性の高い計画の立案を目指す。
第2回	プレ調査の準備と成果予測 調査対象の確保や具体的な調査の手続きを確認するとともに、あり得る問題や成果を具体的に予測する。
第3回	プレ調査実施 本調査と同一の条件でプレ調査を行いながら、調査内容や手続きの不備や改善点を洗い出す。
第4回	プレ調査データ集計・分析 プレ調査の結果を集計し、調査票の信頼性や作業仮説の妥当性等を検討する。また本調査で予定している検定方法を試行し、問題があれば方法の再検討を行う。
第5回	プレ調査の結果に基づく調査方法・内容の修正 第4回において明らかになった問題点を修正し、目的にむけたより妥当性の高い調査方法・内容にむけた調整を行う。
第6回	本調査準備
第7回	本調査実施
第8回	本調査データ集計・分析・1 全ての変数の度数分布や、全てのインタビュー項目の逐語録等を作成しながら、データ分析における基礎資料の重要性を確認し、予定している分析方法の適合度を検討する。
第9回	本調査データ集計・分析・2 作業仮説に基づいた分析を進めるとともに、仮説が棄却された場合の変数の再計算や欠損値処理のあり方等を検討する。
第10回	本調査データ集計・分析・3 グラフ・表等を含めた分析結果の表現方法を検討するとともに、仮説に反したデータの考察を行う。
第11回	分析結果の考察と討議 各自の分析結果を考察・討議しながら、調査者のバイアスを除去するとともに、グループダイナミズム基に新たな視点を加えながら考察を深める。
第12回	修士論文構成の検討 論文で用いるデータの取捨選択や、考察の質および量の検討を行い、独自の主張を軸にした論文全体のストーリーをまとめる。
第13回	修士論文中間報告会にむけたプレゼン資料作成
第14回	修士論文中間報告会リハーサルと内容討議
第15回	修士論文中間報告会資料の修整

*調査等の実施については各自の進捗状況に応じて前後する。

到達目標

1. プレ調査を実施し、結果の検討から研究計画を修正する。
2. 本調査を実施し、仮説検証に向けた科学的なエビデンスを得る
3. 修士論文中間報告会にむけた報告書を作成する。

履修上の注意

文献講読や討議等について、自分の研究テーマとの関連に関わらず積極的に参加すること。
統計分析等の技術が十分では無い場合、授業時間外での指導を受けること。
個別に指示した参考文献・書籍等については必ず目を通すこと。

評価方法

修士論文中間報告会資料を中心に、調査の過程や取組方から総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

授業概要

発達障害の理論、アセスメント、支援のあり方に関する国内外の文献を輪読し、問題意識を高めるとともに、研究テーマを絞り込む。そして、研究テーマに関する基礎文献を踏まえたうえで、研究計画の作成を図り、修士論文に求められる独創的な研究を遂行するための基礎的な力を身につける。

授業計画

第1回	授業の到達目標と進め方について理解する
第2回	研究計画と文献をもとに仮説の明確化を図る
第3回	仮説と仮説を検証するためのデータの関係について検討する
第4回	研究の骨子の確認とデータ収集方法の検討を行う
第5回	収集した予備データの検討、方法の見直し、本データの収集について検討する
第6回	本データを収集し、進捗状況を報告する
第7回	収集した本データの分析の視点を検討する
第8回	分析結果の解釈の仕方について検討する
第9回	分析結果を解釈するための文献整理および分析の視点の見直しを行う
第10回	必要に応じて論文題目の修正を行いつつ、部分的論文草稿を作成する
第11回	データ分析の結果に応じて、部分的論文草稿の内容を見直す
第12回	データ分析の結果を補完する文献を整理し、部分的論文草稿を検討する
第13回	部分的論文草稿をもとに論文全体の構成を検討する
第14回	中間発表の準備およびリハーサルを行う
第15回	論文題目の決定と修士論文執筆計画立案を行う

到達目標

1. 修士号請求論文の論文題目を決定する。
2. 研究の骨子を明確にし、データの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成する。
3. 中間発表を行う。

履修上の注意

- ・他者の研究にも関心を持ち、研究討議に積極的に参加すること。
- ・部分的論文草稿は何度も見直しを行う必要がある。積極的に提出し、指導教員のチェックを受けること。

評価方法

部分的論文草稿と、研究内容の深まりを総合的に評価する(100%)。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで定めた研究テーマについて、さらに深く検討するために、先行研究をあらためて精緻に検討し、予備調査を設計・実施できるよう指導する。そして、予備調査の結果について検討し、次年度の本格的な調査・論文執筆に向けて自らの研究における課題を明らかにするとともに、ここまでの進捗状況をまとめ、中間報告会に向けた発表準備ができるよう指導する。

授業計画

第1回	教育課題研究Ⅱの達成目標と研究計画の確認
第2回	研究実施における倫理的配慮
第3回	研究テーマに即した先行研究の再検討（１）
第4回	研究テーマに即した先行研究の再検討（２）
第5回	研究テーマに即した先行研究の再検討（３）
第6回	予備調査の計画（１）：調査対象と調査内容を検討する
第7回	予備調査の計画（２）：調査方法を検討する
第8回	予備調査の計画（３）：分析方法を確認する
第9回	予備調査の実施：データの回収
第10回	予備調査のデータ入力
第11回	予備調査のデータ分析
第12回	予備調査の結果の検討
第13回	修士論文中間報告会に向けた資料の作成
第14回	修士論文中間報告会のリハーサル
第15回	まとめ：教育課題研究Ⅲに向けて整理する

到達目標

1. 自らの研究テーマに即した調査計画を立てることができる。
2. 予備調査を実施し、本調査に向けた研究方法を考察することができる。
3. 自らの研究の進捗状況と今後の計画について報告することができる。

履修上の注意

基礎的な心理・統計学の知識については授業の中でも説明するが、自らも書籍などを読み、学習することが望ましい。

自身の研究に向き合う時間を十分にとり、主体的、積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：自身の研究テーマに関連する文献や心理学の方法論に関する書籍等を読み込むこと。

復習：発表や議論を踏まえ、自身の考えや研究内容を整理すること。

評価方法

授業内の発表・報告：50%

調査計画の立案：50%

テキスト

テキストは特に指定しない。

個々人の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで立案した研究計画及び予備検証授業計画に基づき、授業実施に向けた教材・教具、カリキュラムを検討・実施し、修士論文中間報告会①に向けて、その結果について発表することを目指す。発表資料作成のため、実際に予備検証授業を実施し、予備検証授業計画書の作成からデータ収集・分析の方法・考察までを経験する。それらの進捗状況を確認しながら、修士論文中間報告会①の準備ができるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文題目の検討：各章の内容確認・自身での章立て
第2回	研究実施における倫理的配慮事項の確認：研究倫理委員会提出書類の作成方法
第3回	予備検証授業の研究方法の検討：教材・教具、カリキュラム作成
第4回	予備検証授業の検証方法の検討：データ収集方法、データ分析方法
第5回	予備検証授業の準備①：研究計画による模擬授業計画の作成
第6回	予備検証授業の準備②：研究計画による模擬授業の実施 【実技演習】
第7回	予備検証授業の準備③：研究計画による模擬授業実施後の計画の修正
第8回	予備検証授業の実施①：教材・教具、カリキュラムの見直し
第9回	予備検証授業の実施②：学習者行動の検討
第10回	予備検証授業の実施③：授業者との振り返りの共有
第11回	予備検証授業の実施④：収集したデータの分析・解釈
第12回	予備検証授業の結果報告発表
第13回	修士論文中間報告会①に向けた資料作成
第14回	修士論文中間報告会①に向けた発表練習
第15回	修士論文中間報告会①に向けた資料の修正・準備

到達目標

- 修士論文の論文題目を決定し、研究の骨子を明確にする。
- 予備検証授業計画の立案・実施をし、研究計画に沿ったデータを収集することができる。
- 予備検証授業後のデータ分析を通して、修士論文中間報告会①に向けた準備をすることができる。

履修上の注意

- 予備検証授業計画立案のため、文献や資料を積極的に収集・レビューする力が求められる。
- 予備検証授業計画の立案に際しては、必要に応じて実技演習を伴う場合がある。
- ※第6時は模擬授業実施のため実技を伴う。

予習・復習

- 自身の研究課題の追求のため、日々の生活の中で、意図的な研究活動時間の確保が必要である。

評価方法

次のように評価する。

- ①修士論文中間報告会①資料（50%）
- ②予備検証授業実施の過程や取り組み（50%）

テキスト

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説体育編」東洋館出版社,2018

授業概要

教育課題研究Ⅰで作成した研究計画書をブラッシュアップするために、さらに先行研究にあたり、目的の明確化を図る。自身の問題意識、研究テーマ、予備調査の結果と考察および進捗状況を整理し、中間報告会における質の高い報告を目指す。調査方法に関する検討、予備調査の設計・実施・結果の検討を行い、次年度に向けて本調査の実施から論文執筆に進めるよう指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：修士論文執筆までの流れと研究計画の再検討
第2回	研究実施における倫理的配慮の確認
第3回	先行研究の検討を通じた研究計画の再検討①：問題と目的への流れ
第4回	先行研究の検討を通じた研究計画の再検討②：目的の明確化とオリジナリティ
第5回	先行研究の検討を通じた研究計画の再検討③：研究方法の検討
第6回	予備調査の計画①：調査対象と調査内容の検討
第7回	予備調査の計画②：調査の手続きの検討
第8回	予備調査の計画③：分析方法の確認
第9回	予備調査の実施／データの回収
第10回	予備調査のデータ入力
第11回	予備調査のデータ分析
第12回	予備調査の結果の検討
第13回	修士論文中間報告会に向けた資料作成
第14回	修士論文中間報告会のリハーサルと内容討議
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅲにむけて

到達目標

1. 研究テーマと研究計画を明確にして、調査計画を立てることができる。
2. 予備調査の実施・分析を通して、本調査の研究方法を再考できる。
3. 修士論文中間報告会に向けた資料を作成し、研究の計画と進捗状況を報告することができる。

履修上の注意

心理学の研究法および統計手法については、関連書籍などを読んで自ら学び理解することを期待する。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探究する時間を持つこと。

評価方法

修士論文中間報告会資料を中心に、調査の過程や取り組みから総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで立案した研究計画に基づき、研究の目的をより明確化すると共に、研究方法の検討を行う。また、本調査に向けて、調査計画の検討、予備調査の実施と分析を行い、自身の研究における課題を明らかにしていく。研究を進める上で必要な研究調査分析における技術、方法論について指導する。修士論文中間報告会に向けて、ここまでの進捗状況をまとめ、発表準備を行う。

授業計画

第1回	研究計画書の確認と教育課題研究Ⅱの到達目標について
第2回	研究テーマに即した研究の再検討（１）課題と目的の明確化
第3回	研究テーマに即した研究の再検討（２）仮説の検討
第4回	研究テーマに即した研究の再検討（３）研究方法の検討
第5回	研究テーマに即した研究の再検討（４）文献整理および文献、資料、楽譜の扱い方
第6回	調査計画の検討（１）調査対象、内容の検討
第7回	調査計画の検討（２）調査方法の検討
第8回	調査計画の検討（３）倫理的配慮
第9回	予備調査の実施
第10回	予備調査の入力
第11回	予備調査の分析
第12回	予備調査の考察
第13回	修士論文中間報告会①に向けた資料作成
第14回	修士論文中間報告会①のリハーサルと内容討議
第15回	修士論文中間報告会①、まとめと展望：教育課題研究Ⅲにむけて

到達目標

1. 研究テーマと研究計画を明確にし、調査計画を立てることができる。
2. 予備調査の実施・分析を通して、本調査の研究方法を再考することができる。
3. 修士論文中間報告会に向けた資料を作成し、研究の計画と進捗状況を報告することができる。

履修上の注意

自身の研究に関連する文献、資料を積極的に検索し、クリティカルに読解する力が求められる。

予習・復習

予習：文献資料の収集、討議等においては積極的に文献探索をし、調査に十分な準備をして参加すること。

復習：自身の考えや研究内容を熟考、整理する時間を設け、自主学習に努めること。

評価方法

修士論文中間報告 50%、調査の過程や取り組み 50%から総合的に評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。

各自の状況に応じて、適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅱでは、修士論文執筆に向けて、主として他者に向けての発表・対話・応答の方法や各自の問いに対する先行研究や研究方法論の検討、具体的な論文タイトル・目次構成の設定方法について指導する。ポスターセッションやプレ論文発表会を通して、研究は「他者」と共に作っていくことや口頭発表と論文執筆の「バランス」をとることについて学んでいく。また、研究の問い（リサーチ・クエスチョン）と研究方法論の重要性について気づき、修正していくことを学んでいく。

授業計画

第1回	イントロダクション——ポスター発表の方法
第2回	ポスターの作成①——ストーリーラインの設定及び研究の問いの明確化
第3回	ポスターの作成②——テーマと問い・先行研究の批判と結論・対象と方法・主張と課題
第4回	ポスターセッション——対話の作法・コメントの作法
第5回	ポスターセッションから見てきた課題の整理——他者との対話と自己の仮説の修正
第6回	修士論文の構成①——目次構成の作成と今後の課題の明確化；タイトルの付け方
第7回	先行研究の批判的検討と研究対象・方法論の先鋭化①——研究対象の明確化
第8回	先行研究の批判的検討と研究対象・方法論の先鋭化②——調査・分析方法と研究倫理
第9回	先行研究の批判的検討と研究対象・方法論の先鋭化③——研究方法論の問い直し
第10回	修士論文の構成②——目次構成の修正と今後の課題の明確化
第11回	プレ修士論文発表会の運営方法——発表対象・司会と運営・発表準備・謝意
第12回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策①——研究内容と課題の整理
第13回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策②——ストーリーラインの設定
第14回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策③——主張と質疑応答の対策
第15回	プレ修士論文発表会——研究内容の発表・質疑応答と今後の課題・悩みの共有化

到達目標

1. 先行研究の批判的検討を通して、研究の内容や方法について他者に向けて発表することができる。
2. 研究計画書を修正・精緻化することで、修士論文のタイトル及び目次構成を設定することができる。
3. 研究方法論について調査し、自己の研究方法論を暫定的に決定・実施することができる。

履修上の注意

教育課題研究Ⅱでは、研究の作法に関するアウトプット（発表や質疑応答）とインプット（先行研究や研究方法論の検討）について共同で学んでいく。

大学院生の関心によっては、学外の国立国会図書館等での調査を実施することもある。また、学外でのイベント（学会や研究会）に参加し、学究の諸先輩に発表・対話・応答の方法を学ぶこともある。

予習・復習

研究テーマや周辺領域に関連する論文のレビューを作成することで、自身の研究の内容と方法に関する学術上の位置づけを確認していただきます。文献については、指導の中で適宜紹介します。

評価方法

- ・修士論文の目次構成：50%
- ・授業内の発表・報告：50%

テキスト

文献については、関連学会誌や他の分野のものなど適宜紹介する。

参考文献：イアン・パーカー（2008）『ラディカル質的心理学——アクションリサーチ入門』ナカニシヤ出版。

ウヴェ・フェリック監修「Sage 質的研究キット」シリーズ（2016-2018）。

やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ他（2013）『質的心理学ハンドブック』新曜社。

サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（2019）『質的研究法マッピング』新曜社。

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法——問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。

授業概要

教育課題研究Ⅰで立案した研究計画に基づき、研究テーマに関連する先行研究のレビューを続けながら質的調査を開始し、リサーチクエスションを明確化させることを目的とする。
受講生同士で調査のデータセッションを実施して分析の方向性を定めていき、修士論文中間報告会に向けて準備を進めていく。

授業計画

第1回	教育課題研究Ⅱの到達目標の確認と研究計画書の再検討
第2回	調査の準備 調査倫理・調査手続きの確認
第3回	調査の開始（以降、授業時間外にも調査を実施）
第4回	先行研究の収集・整理・調査データの整理
第5回	データセッション・分析視角の確認①
第6回	データセッション・分析視角の確認②
第7回	データ分析・考察①
第8回	データ分析・考察②
第9回	分析結果に関する討議
第10回	修士論文の構想① 論文の構成・題目
第11回	修士論文の構想② 先行研究における自分の研究の位置づけ
第12回	修士論文の構想③ 研究目的の再確認
第13回	修士論文の構想④ 報告資料の作成
第14回	修士論文の構想⑤ 報告の準備
第15回	修士論文中間報告会のリハーサル

到達目標

- ・調査を開始するにあたり、調査倫理・データの扱いについて理解することができる。
- ・先行研究の批判的検討を通して、自分の研究の位置づけを明確にし、独自性を主張することができる。
- ・修士論文中間報告に向けた資料の準備をすることができる。

履修上の注意

- ・自分の研究テーマに関連する資料や文献を積極的に探索することが求められる。
- ・調査開始前に調査協力者に対し、研究の目的・研究内容について書面で作成して説明することが求められる。
- ・調査を開始したら、調査日にデータ（フィールドノート）をPCでまとめる。

予習・復習

- ・自身の研究テーマに関する資料を積極的に収集すること。
- ・データセッションやデータ分析の討議において指摘された内容はその都度修正すること。

評価方法

先行研究の批判的検討・データ分析や討議・修士論文中間報告会の資料から総合的に評価する(100%)。

テキスト

各自の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで作成した研究計画について、先行研究を踏まえて精緻化する。目的、仮説、方法に従って調査内容を定めていく。予備調査を設計・実施する。予備調査の結果について検討し、次年度の本調査の実施から論文執筆に進めるように指導する。自身の研究の進捗状況を整理し、中間報告会における質の高い報告を目指す。

授業計画

第1回	オリエンテーション：修士論文執筆までの流れと研究計画の再検討
第2回	研究実施における倫理的配慮の確認
第3回	先行研究の検討を通した研究計画の再検討①
第4回	先行研究の検討を通した研究計画の再検討②
第5回	先行研究の検討を通した研究計画の再検討③
第6回	予備調査の計画①：調査対象と調査内容の検討
第7回	予備調査の計画②：調査の手続きの検討
第8回	予備調査の計画③：分析方法の確認
第9回	予備調査の実施/データの回収
第10回	予備調査のデータ入力
第11回	予備調査のデータ分析
第12回	予備調査の結果の検討
第13回	修士論文中間報告会に向けた資料作成
第14回	修士論文中間報告会のリハーサルと内容討議
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅲにむけて

到達目標

1. 研究テーマと研究計画を明確にして、調査計画を立てる。
2. 予備調査の実施・分析を通して、本調査の研究方法を再考する。
3. 修士論文中間報告会に向けた資料を作成し、研究の計画と進捗状況を報告する。

履修上の注意

心理学の研究法および統計手法については、関連書籍などを読んで自ら学び理解することを期待する。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探究する時間を持つこと。

評価方法

研究に取り組む態度（50%）と課題の達成度・報告内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅰに続き、修士論文執筆に向けて、研究方法や他者との議論の仕方について学ぶ。プレ調査を実施し、その結果について報告と対話を行うことで、それぞれの研究テーマにおける問いと考察を深めていく。口頭発表やポスター発表の準備や話し方、研究を深めていくための質疑や議論の仕方など、研究活動の基礎について学ぶ。

授業計画

第1回	ポスター発表と口頭発表、対話の方法
第2回	ポスターの作成① 研究全体の計画と精緻化
第3回	ポスターの作成② 問題と目的、方法
第4回	ポスターセッション 発表の練習と対話による問いの深化
第5回	研究テーマ・問いの見直し
第6回	論文題目について 題目の役割とは
第7回	問いと研究方法の関係
第8回	調査方法の具体的な検討 対象の選定、調査内容の検討
第9回	研究調査における倫理的配慮について
第10回	プレ調査の実施① 調査の進捗の報告
第11回	プレ調査の実施② データの整理
第12回	プレ調査の実施③ データの分析
第13回	プレ調査の実施④ 結果と考察
第14回	プレ調査発表 報告と対話の実践
第15回	研究計画の振り返りと再設定 今後の課題と悩みの共有

到達目標

1. わかりやすい研究発表を行うことができる。
2. 調査計画を立て、プレ調査の実施から本調査に向けた研究方法を考察できる。
3. 研究における倫理的配慮について、適切に理解し実践できる。

履修上の注意

さまざまな文献に触れる際に浮かんだ疑問や感想、意見などを書き留め、文献やノートを適切に整理すること。文献の検索や購読は、自主的に継続して行なっていくこと。学生の関心に応じて、学外の保育施設の保育実践を観察したり、また、学外のイベント（学会や研究会など）に参加して、研究発表のあり方を学んだりすることもある。

予習・復習

予習：関連する文献レビューを継続して行うこと。

復習：授業での学びを復習しながら、研究の問いや研究計画を見直す作業を行うこと。

評価方法

- ・ポスター発表（50%）、プレ調査発表（50%）

テキスト

受講生の研究関心に応じて適宜紹介する。

授業概要

「教育課題研究Ⅰ」をもとに、先行研究の購読を行い、「論文題目」を決定する。優れた修士論文の作成をめざし、授業実践に関する研究テーマの確定、研究計画の決定ができるように指導する。

授業計画

第1回	授業実践の省察：授業実践に関する「課題意識」を発表し合う。
第2回	実践記録の分析①：過去の特徴的な実践記録を読み合う。
第3回	実践記録の分析②：実践記録を取り上げた先行研究を読み合う。
第4回	実践記録の分析③：実践記録に関する「課題意識」を捉え直す。
第5回	先行研究の収集①：「課題意識」に関連した先行研究を集める。
第6回	先行研究の収集②：「課題意識」に関連した先行研究を集める。
第7回	先行研究の講読①：「課題意識」に関連した先行研究を読み合う。
第8回	先行研究の講読②：「課題意識」に関連した先行研究を読み合う。
第9回	先行研究の講読③：「課題意識」に関連した先行研究を読み合う。
第10回	先行研究の講読④：「課題意識」に関連した先行研究を読み合う。
第11回	先行研究の講読⑤：「課題意識」に関連した先行研究を読み合う。
第12回	先行研究の整理①：「課題意識」と先行研究との関係をまとめる。
第13回	先行研究の整理②：「課題意識」と先行研究との関係をまとめる。
第14回	論文題目の決定：「課題意識」に基づいた論文題目を決める。
第15回	研究計画の決定：論文題目に基づいた研究計画を決める。

到達目標

自分の「問題意識」を精緻化し、「課題意識」を明確化できるような「研究計画」に従って、独創性を発揮した修士論文の完成をめざして研究に取り組む。

履修上の注意

修士論文の独創性は、執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けるために、自分なりの研究ノートや文献目録づくりを工夫する。

予習・復習

授業における研究討議への積極的な参加が求められるので、あらかじめ準備をしておく。

評価方法

研究討議への積極的な参加（50%）、各回に提出する研究経過のレポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅰで修得した研究手法についての知識を生かし、研究計画に則って、先行研究の整理及びまとめの発表を行う。研究テーマの探究に適切なフィールド（保育所・幼稚園）を選定し、丁寧なアプローチを行う。フィールド園では、必要に応じて予備調査を行った後、実践・調査、データの収集に着手する。

授業計画

第1回	研究計画書の確認と教育課題研究Ⅱの進め方について
第2回	問題と目的の明確化
第3回	仮説の検討
第4回	研究方法の検討①先行研究の批判
第5回	研究方法の検討②自身の研究方法についての発表
第6回	見学①（研究内容に合わせたフィールド園A）
第7回	見学②（研究内容に合わせたフィールド園B）
第8回	調査計画と倫理的配慮
第9回	予備調査の計画①
第10回	予備調査の計画②
第11回	予備調査の実施報告
第12回	予備調査のデータ分析
第13回	修士論文中間報告会（第1回）の準備①（資料作成）
第14回	修士論文中間報告会（第1回）の準備②（ゼミ内発表と修正）
第15回	修士論文中間報告会①を振り返って（研究計画・研究内容の改善）

到達目標

1. 研究テーマと研究計画に沿って調査計画を立てることができる。
2. 予備調査の実施・分析によって本調査の研究方法を修正できる。
3. 修士論文中間報告会で研究の計画と進捗状況を、明確な言葉で報告することができる。

履修上の注意

自身の研究に対して、十分な時間と手間を惜しまない姿勢を持つ。
資料の探し方、研究の方法について、分からないことは積極的に質問する。

予習・復習

予習：授業で検討予定の資料は熟読し批判したり、別の視点が提示できるようにしておく。
復習：授業で出た課題（疑問点や自身の研究についての修正点など）は必ず詳細なメモとして残すようにする。

評価方法

授業への参加度（討議・発表）40%、研究への取り組み 60%

テキスト

テキストは特に指定しない。
各自の研究内容に応じて、資料を提示する。

授業概要

本演習では、教育課題研究Ⅰで定めた算数・数学教育を主題とした研究テーマを踏まえて、調査における研究手法・方法論・理論的パースペクティブ・認識論を理解し、調査計画の立案ができるよう指導する。また、演習の後半では、第1回修士論文中間報告会に向けた発表の準備を行うことを通して、研究テーマと調査計画の精緻化に努める。

授業計画

第1回	オリエンテーション：教育課題研究Ⅰで定めた研究テーマの再確認
第2回	量的研究と質的研究
第3回	調査における主要な要素①：研究手法
第4回	調査における主要な要素②：方法論
第5回	調査における主要な要素③：理論的パースペクティブ
第6回	調査における主要な要素④：認識論
第7回	調査計画の立案①：研究手法、方法論の検討
第8回	調査計画の立案②：調査対象の検討
第9回	調査計画の立案③：調査人数の検討
第10回	調査計画の立案④：期待される成果の検討
第11回	論文構成および研究計画書の作成
第12回	論文構成および研究計画書の修正
第13回	第1回修士論文中間報告会のための資料の作成
第14回	第1回修士論文中間報告会のリハーサル
第15回	まとめ：第1回修士論文中間報告会のリフレクションと調査計画の見直し

到達目標

- ・調査における研究手法・方法論・理論的パースペクティブ・認識論を理解することができる。
- ・自身の研究テーマに沿った調査計画を立案することができる。
- ・第1回修士論文中間報告会において、研究の進捗状況や今後の展望を説明することができる。

履修上の注意

- ・「教育課題研究Ⅰ」を履修済みであることが望ましい。
- ・修士論文を書き上げるためには、論理的に文章を書くことが求められる。必要に応じて、次の書籍を参照されたい。

本多勝一(2015). 新版 日本語の作文技術. 朝日新聞出版.

予習・復習

予習：各回のテーマに応じたレジュメを作成する。

復習：授業内で受けた指摘をまとめるとともに、次回以降の授業に向けて改善を行う。

評価方法

- ・授業内の発表・レジュメ(40%)、調査の研究計画(30%)、中間報告会(30%)で評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。履修者の関心に応じて、適宜資料を配布する。また、必要に応じて、下記の参考文献を参照されたい。

中原忠男(編)(2001). 算数・数学科重要用語300の基礎知識. 明治図書.

日本教科教育学会(編)(2017). 教科教育研究ハンドブック：今日から役立つ研究手引き. 教育出版.

日本数学教育学会(編)(2011). 数学教育学研究ハンドブック. 東洋館出版社.

日本数学教育学会(編)(2018). 算数教育指導用語辞典〔第五版〕. 教育出版.

日本数学教育学会(編)(2021). 算数・数学 授業研究ハンドブック. 東洋館出版社.

全国数学教育学会(編)(2024). 数学教育学の軌跡と展望：研究のためのハンドブック. ナカニシヤ出版.

授業概要

教育課題研究Ⅱで作成した研究計画をもとに、研究テーマに関わる文献収集を継続するとともに、予備調査・本調査を実施し、データの収集・整理を行う。そして、収集された資料やデータの分析の視点、方法を提示・討論しながら研究テーマについて考察を深め、修士論文の中間報告会での発表を行うことができるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文作成に向け、論文作成の手法を理科教育関係学会誌（理科教育研究、環境教育、農業教育学会誌など）を参考に再確認する。
第2回	自身の研究テーマに係わる既往研究のレビューを通して、「研究の背景と目的」部分の執筆を行う。
第3回	各自が書いた「研究の背景と目的」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第4回	各自が再考した「研究の背景と目的」部分について、文献情報を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。「研究方法」部分の執筆を開始する。
第5回	各自が書いた「研究方法」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第6回	各自が再考した「研究方法」部分について、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。予備調査を開始する。
第7回	予備調査の結果により得られたデータの集計・解析方法を検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に集計・解析を行う。
第8回	予備調査のデータを集計・解析した結果について、文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再分析し、本調査でのデータ収集や解析の方法を検討する。本調査を開始する。
第9回	本調査の結果により得られたデータの集計・解析方法を検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に集計・解析を行う。
第10回	本調査のデータを集計・解析した結果について、文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再分析し、「結果及び考察」部分の執筆を開始する。
第11回	各自が書いた「結果及び考察」部分に対して、修正の検討を行う。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第12回	各自が再考した「結果及び考察」部分について、討論・批判的検討から得た情報をもとに修正して完成させる。
第13回	ここまで得られた成果及び今後の研究の方向性・予定などを、プレゼンテーションソフトを用いて中間報告会で発表するための準備を行う。
第14回	中間報告会に向けたゼミ内の検討会を行い、討論・批判的検討から得た情報を基に内容及び発表方法の修正を行う。
第15回	発表内容とその方法が適切であるかどうか検討する。討論・批判的検討から得た情報を基に再修正を行い、中間報告会に向けた準備を完了する。

到達目標

1. 修士論文の予備調査・本調査を実施し、データの収集・整理を行うことができる。
2. データの分析の視点や方法を提示・討論しながら研究テーマについて考察を深められる。
3. 修士論文の中間報告会での発表を行うことができる。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法**評価方法**

出席と発表内容（30%）、討論への参加状況（20%）、研究への意欲（20%）及び中間報告会での発表（30%）などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

第1回修士論文中間報告会で指摘された課題等をふまえ、論文全体の構成や章立てを再検討する。論文の「問い」と「仮説」を明確にしたうえで、学術的な意義と位置づけを明示できるようにする。リサーチクエスチョンを確定し、それを明らかにするための本調査を実施する。得られたデータの分析・考察をふまえ修士論文執筆に着手する。

授業計画

第1回	第1回中間報告会の反省～指摘されたコメントを確認し課題を明らかにする。
第2回	「問い」と「仮説」の再検討～学術的意義とオリジナリティの観点からの再考。
第3回	本調査の研究計画書の作成～実施にむけての点検。
第4回	リサーチクエスチョンの確定～調査フィールド、調査対象者の選定。
第5回	調査票の作成～調査票を確定する。
第6回	本調査の実施①～調査の進捗具合を報告する。
第7回	本調査の実施②～データ整理とデータクリーニング。
第8回	本調査の実施③～データの分析。
第9回	本調査の実施④～データの考察。
第10回	修士論文第一稿の作成①～データの示し方と調査結果の位置づけを明らかにする。
第11回	修士論文第一稿の作成②～「はじめに」を執筆し論文の概要を示す。
第12回	修士論文第一稿の作成③～「研究の目的」「問題関心」「研究方法」等、枠組みを示す。
第13回	第2回修士論文中間報告会の準備①プレゼン資料の作成。
第14回	第2回修士論文中間報告会の準備②プレゼン資料の修正。
第15回	第2回修士論文中間報告会の準備③報告のリハーサルと最終確認。

到達目標

1. 自らたてた「問い」と「仮説」の学術的意義とオリジナリティについて明確に示せるようにする。
2. 第一稿の執筆に着手し、論文の枠組みにあたる「問題の所在」「研究の目的」「研究方法」まで完成させる。
3. 第2回修士論文中間報告会に向けた準備をする。

履修上の注意

引き続き、研究に真摯に取り組む態度を求める。本調査の実施にあたっては、調査倫理を十分理解し、遵守することが求められる。調査倫理について自ら学び、理解を深めておくこと。

予習・復習

研究や論文執筆のための時間が十分確保できるようにし、研究ノートは常にブラッシュアップしていくこと。

評価方法

研究に取り組む態度（50%）と課題の達成度・報告内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

研究の進捗状況に応じて、適宜指示する。

授業概要

プレ調査の結果を修士論文中間発表会で報告し、本調査にむけた調査方法・内容の評価・改善を行う。本調査を実施後に結果の集計・分析を行いながら、目的に応じて必要な追加的な情報を洗い出す。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における指摘事項の確認
第2回	修士論文中間報告会における指摘事項への対応
第3回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・1 中間報告会等での成果を踏まえ、仮説の検証により効果的な分析方法を再検討するとともに、分析方法に大きな変更が無かった場合も始めから再分析を行い、第3者による計算のチェックを受けることで、データの信頼性を確保する。
第4回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・2
第5回	図表の表現等の再検討 グラフや表等について、データの表現として適切であるか、複数の表現方法を比較することで検討し、「何を表すか」と同様に「どうやって表すか」ということの重要性を知る。
第6回	先行研究の再確認と参考資料の追加を通じた研究の独自性の確認 一連の調査分析・考察の概略をまとめた後、改めて先行研究を見直すことで、自身の主張の独自性や、その根拠となるエビデンスの妥当性を再確認する。
第7回	修士論文作成と進捗状況の発表・1 第6回までの内容を踏まえ、各論的な修正を踏まえながら、修士論文本体の作成を行う。参加者は毎週進捗状況の報告を義務づけ、無理なく論文作成が可能なスケジュール管理を徹底する。
第8回	修士論文作成と進捗状況の発表・2
第9回	修士論文作成と進捗状況の発表・3
第10回	修士論文作成と進捗状況の発表・4
第11回	修士論文作成と進捗状況の発表・5
第12回	修士論文第一稿発表 第一稿を比較的早く提出することで、全体の構成の調整や部分的な再分析を可能にし、論文としての完成度を高めることを目指す。
第13回	修士論文発表会プレゼン資料の作成と修士論文の修整
第14回	修士論文発表会リハーサルと修士論文の修整
第15回	修士論文最終稿発表および校正

*各回の内容は各自の進捗状況に応じて前後する場合がある。

到達目標

1. 科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。
2. 先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。
3. 具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。

履修上の注意

修士論文作成にあたっては余裕を持って取組み、スケジュールを厳守すること。
論文が水準に満たない場合は、修士論文発表会への参加を認めない場合がある。

評価方法

修士論文の内容を中心（100％）に総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

授業概要

1 年次に作成した研究計画に基づき、収集してきた資料を整理し、発達障害に関する研究テーマと研究計画、方法等を確定する。特に、仮説を検証するためのデータの関係など研究の骨子となる部分を明確にし、必要に応じて見直しを図る。再度、資料の収集・整理及びデータの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成し、論文題目を決定し、中間発表を行う。

授業計画

第 1 回	中間発表の意見をもとに論文全体の構成、研究計画を確認する
第 2 回	中間発表の意見をもとに論文の見直しを図る
第 3 回	収集・分析したデータによる仮説の検証方法を検討する
第 4 回	分析結果と仮説の一致・不一致箇所を確認する
第 5 回	分析結果と仮説の一致箇所に関して解釈し、文献整理を行う
第 6 回	分析結果と仮説の不一致箇所に関する文献整理の仕方について検討する
第 7 回	仮説と結果の対応関係について検討し、論文構成を図式化する
第 8 回	結果に用いる図表と分析結果を定める
第 9 回	研究対象や方法を整理し、必要に応じて文献による補完を行う
第 10 回	序論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第 11 回	結論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第 12 回	研究の限界と将来の課題について検討しつつ、文献による補完を行う
第 13 回	修士号請求論文内容を全体構成の観点から検討し、論文完成を促す
第 14 回	修士号請求論文発表に向けて原稿を作成する
第 15 回	まとめ 修士号請求論文提出に向けて

到達目標

1. 修士号請求論文を完成させる。
2. 発達障害研究における修士号請求論文の内容の位置づけを認識する。
3. これまでの一連の研究活動を通じて、発達障害のある児童への教育的支援を実践する高度専門職としての専門性を身につける。

履修上の注意

- ・研究と執筆を計画的に行い、その進捗状況を適宜報告すること。
- ・修士号請求論文は繰り返し見直しをする必要があるため、積極的に提出し、指導教員のチェックを受けること。

評価方法

論文草稿、研究の進捗状況及び修士号請求論文発表原稿により評価する(100%)。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅱまでに立案した研究計画および実施した予備調査の結果に基づき、本調査を計画・実施できるよう指導する。さらに、本調査の結果について、統計的なデータ分析および分析結果の検討を行い、本格的な修士論文執筆への準備を行えるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における意見を踏まえた研究計画の確認
第2回	予備調査の結果を踏まえた本調査の計画（1）：調査対象と調査内容を検討する
第3回	予備調査の結果を踏まえた本調査の計画（2）：調査方法を検討する
第4回	予備調査の結果を踏まえた本調査の計画（3）：分析方法を確認する
第5回	本調査の実施準備：調査票などの作成
第6回	本調査の実施準備：調査票のチェック
第7回	本調査の実施（1）
第8回	本調査の実施（2）
第9回	本調査のデータ入力
第10回	本調査のデータ分析・解釈（1）：データクリーニング
第11回	本調査のデータ分析・解釈（2）：記述統計量等の確認
第12回	本調査のデータ分析・解釈（3）：発展的な統計分析
第13回	本調査のデータ分析・解釈（4）：質的データの検討
第14回	本調査のデータ分析結果のまとめ
第15回	まとめ：教育課題研究Ⅳに向けて整理する

到達目標

1. 自らの研究テーマに即した調査計画を立てることができる。
2. 本調査を行い、分析を行うことができる。
3. 修士論文本文の執筆に向けた課題の整理を行うことができる。

履修上の注意

基礎的な心理・統計学の知識については授業の中でも説明するが、自らも書籍などを読み、学習することが望ましい。

自身の研究に向き合う時間を十分にとり、主体的、積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：自身の研究テーマに関連する文献や心理学の方法論に関する書籍等を読み込むこと。

復習：発表や議論を踏まえ、自身の考えや研究内容を整理すること。

評価方法

授業内の発表・報告：50%

研究計画の内容：50%

テキスト

テキストは特に指定しない。

個々人の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅱで実施した予備検証授業についてまとめた修士論文中間報告会①の内容・指摘事項に基づき、本検証授業実施に向けた教材・教具、カリキュラムを検討・実施する。その結果をまとめて、修士論文中間報告会②で発表することを目指す。発表資料作成のため、実際に本検証授業を実施し、本検証授業計画書の作成からデータ収集・分析の方法と考察までを経験する。それらの進捗状況を確認しながら、修士論文中間報告会②の準備を行うことを通して、本格的な修士論文執筆への準備ができるように講義する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における質問事項の確認と修正
第2回	予備検証授業結果の検討・本検証授業に向けた研究計画の修正
第3回	本検証授業に向けた研究計画の発表
第4回	本検証授業の実施①：教材・教具、カリキュラムの見直し
第5回	本検証授業の実施②：学習者行動の検討
第6回	本検証授業の実施③：授業者との振り返りの共有
第7回	本検証授業の実施④：収集したデータ分析・解釈
第8回	本検証授業結果の分析
第9回	本検証授業結果の考察とまとめ
第10回	本検証授業結果の報告発表
第11回	修士論文中間報告会②へ向けての発表資料作成
第12回	修士論文中間報告会②へ向けてのプレゼン作成
第13回	修士論文中間報告会②へ向けての発表練習
第14回	プレゼン。発表資料の修正
第15回	修士論文中間報告会②に向けた準備を完了する。

到達目標

- 修士論文中間報告会①で指摘された課題等を踏まえ、本検証授業計画を立案し、研究計画全体の構成を再検討することができる。
- 本検証授業実施から得られたデータの分析・考察を踏まえて修士論文執筆の準備をすることができる。
- 本検証授業の実施を通し、自身のリサーチクエスションから得られた知見の学術的意義とオリジナリティについて明確に示すことができる。
- 修士論文中間報告会②に向けた準備をすることができる。

履修上の注意

- 本検証授業計画立案のため、中間報告会①で指摘された課題を客観的に捉らえる力、課題の修正のために文献や資料を積極的に収集・レビューする力が求められる。
- 本検証授業計画の立案に際しては、必要に応じて実技演習を伴う場合がある。

予習・復習

- 自身の研究課題の追求のため、日々の生活の中で、意図的な研究活動時間の確保が必要である。

評価方法

次のように評価する。

- ①修士論文中間報告会②資料（50％）
- ②本検証授業実施の過程や取り組み（50％）

テキスト

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説体育編」東洋館出版社、2018

授業概要

教育課題研究Ⅱで作成した研究計画書と予備調査の結果を基に、本調査の計画を立て、調査を実施する。質問紙調査の場合は、本調査のデータ回収、入力を行い、目的に合った統計的分析を行う。インタビュー調査の場合は、データを質的に分析する。分析結果を検討し、修士論文の本文執筆に向けて整理できるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における指導事項の確認
第2回	予備調査の結果の検討と研究計画の修正：目的と方法の確認
第3回	予備調査の結果の検討と調査方法の修正：調査対象者・調査内容・手続き・分析の検討
第4回	予備調査の結果の検討と本調査の計画：調査対象者・調査内容・手続き・分析の決定
第5回	本調査の実施準備①：調査票／インタビューガイドの作成など
第6回	本調査の実施準備②：調査対象者の手配など
第7回	本調査の実施①：調査票の配布／インタビューの実施など
第8回	本調査の実施②：データの回収など
第9回	本調査のデータ分析①：データの入力と整理
第10回	本調査のデータ分析②：データ特徴の確認
第11回	本調査のデータ分析③：統計分析／質的分析
第12回	本調査のデータ分析④：発展的な分析の実施
第13回	本調査のデータ分析⑤：分析結果の多角的な検討
第14回	本調査のデータ分析結果のまとめと報告
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅳに向けて

到達目標

1. 研究の目的を明確にし、本調査の計画を立てることができる。
2. 本調査を実施し、目的に合った分析を行うことができる。
3. 先行研究と課題の整理を行い、修士論文の執筆に向けた準備を進めることができる。

履修上の注意

心理学の統計手法については、関連書籍などを読んで自ら学び理解することを期待する。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探究する時間を持つこと。

評価方法

調査に関する報告内容、研究への取り組みから総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅱまでに立案した研究計画および実施した予備調査の結果に基づき、本調査を計画・実施する。科学的根拠に基づいた調査が実施できるよう、必要な方法論、技術についての指導を行う。本調査の結果について、データ分析および分析結果の検討を行い、本格的な修士論文執筆への準備ができるよう、講義をする。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会①での指摘内容を踏まえた研究計画および研究内容の確認
第2回	予備調査の結果の検討と研究方法の再考
第3回	文献リストの作成と討議
第4回	本調査へ向けての準備
第5回	本調査の実施①各自の研究方法に沿って調査を行う
第6回	本調査の実施②各自の研究方法に沿って調査を行う
第7回	本調査の実施③各自の研究方法に沿って調査を行う
第8回	本調査結果のデータ入力
第9回	本調査結果の整理
第10回	本調査結果の分析
第11回	本調査結果の考察とまとめ
第12回	論文構成の確認と整理
第13回	修士論文中間報告会②へ向けての発表資料の作成
第14回	修士論文中間報告会②へ向けてのリハーサル
第15回	修士論文中間報告会②、まとめ：教育課題研究Ⅲにむけて

到達目標

1. 科学的な根拠に基づいた本調査を行うことができる。
2. 本調査結果の整理、分析を通して、論文全体を再考することができる。
3. 修士論文中間報告会に向けた資料を作成し、研究の計画と進捗状況を報告することができる。

履修上の注意**履修上の注意**

自身の研究に関連する文献、資料を積極的に検索し、クリティカルに読解する力が求められる。

予習・復習**予習・復習**

予習：本調査に向けて積極的な文献探索をし、十分な準備をして参加すること。
 復習：自身の考えや研究内容を熟考、整理する時間を設け、自主学習に努めること。

評価方法**評価方法**

修士論文中間報告 50%、調査の過程や取り組み 50%から総合的に評価する。

テキスト**テキスト**

テキストは特に指定しない。
 各自の状況に応じて、適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅲでは、修士論文を実際に執筆し、研究の問いと方法論の関係性、研究倫理について指導する。また、修士論文中間報告会に向けて、聞き手にとってわかりやすい発表となるように発表内容を検討し、プレ報告会を通して、自己の主張と質疑応答によってどのような世界が構想できるのか具体的に想定していく。Ⅲでの目的は、論文の執筆・修正はもちろんであるが、他者との対話を通して新たな世界を構築していく研究の新規性（オリジナリティ）と公共財としての研究論文の意義や価値を体感することにある。そのための研究方法・分析方法の再確認・再修正や研究倫理教育を徹底していく。

授業計画

第1回	イントロダクション——修士論文執筆の作法と修士論文中間報告会に向けて
第2回	修士論文の構成①——課題の共有と目次構成の修正
第3回	先行研究の批判的検討と研究の問い・方法論の先鋭化①——研究の問いの再焦点化
第4回	先行研究の批判的検討と研究の問い・方法論の先鋭化②——調査・分析方法の自覚化
第5回	先行研究の批判的検討と研究の問い・方法論の先鋭化③——研究方法論の問い直し
第6回	修士論文の構成②——論文執筆及び調査・分析方法と研究倫理
第7回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化①——研究デザイン・配置の調整
第8回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化②——会話分析方法の調整
第9回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化③——ディスコース分析方法の調整
第10回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化④——ドキュメント分析方法の調整
第11回	プレ修士論文中間報告会の運営——発表対象・司会と運営・発表準備・謝意
第12回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策①——研究内容と課題の整理
第13回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策②——ストーリーラインの設定
第14回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策③——主張と質疑応答の対策
第15回	プレ修士論文中間報告会——研究内容の発表・質疑応答と今後の課題・悩みの共有化

到達目標

1. 修士論文を実際に執筆しながら、論文の作法や研究の意義及び価値について認識・体感する。
2. 共同による批判的検討を通して、研究の問いと方法論のズレを調整することができる。
3. 研究倫理の作法に基づいて研究活動を遂行することができる。

履修上の注意

教育課題研究Ⅲでは、実際に論文を執筆し、その作法や研究の問いと方法論の関係性、研究倫理について共同で学んでいく。

大学院生の関心や成長に応じて、学外の国立国会図書館や研究機関等で調査したり、学外での学会や研究会に参画し、研究者や関係者に向けて発表してコメントを頂戴したりすることもある。

予習・復習

研究の問いやデザインを先鋭化するために、構造を図式化することで端的に説明できるようにしていただく。文献については、指導の中で適宜紹介します。

評価方法

- ・修士論文の概要・執筆：70%
- ・授業内での発表と質疑応答：30%

テキスト

文献については、関連学会誌や他の分野のものなど適宜紹介する。

参考文献：ウヴェ・フェリック監修 「Sage 質的研究キット」シリーズ（2016-2018）。

やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ他（2013）『質的心理学ハンドブック』新曜社。

フレッド・M・ニューマン（2017）『真正の学び／学力——質の高い知をめぐる学校再建』春風社。

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社。

井頭昌彦（2023）『質的研究アプローチの再検討——人文・社会科学からEBPsまで』勁草書房。

授業概要

教育課題研究Ⅱで作成した研究計画をもとに、研究テーマに関する先行研究を収集しながら調査データをまとめながら修士論文を執筆していく。データセッションを通して分析の方向性と先行研究における本研究の位置づけを明確にする。

修士論文の執筆を開始し、中間報告会で報告ができるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における指導事項の確認
第2回	論文構成・章立ての再検討
第3回	研究方法の確認、調査における分析視角の検討
第4回	調査の実施①
第5回	データセッション・分析①
第6回	調査の実施②
第7回	データセッション・分析②
第8回	調査の実施③
第9回	データセッション・分析③
第10回	分析結果の考察・まとめ
第11回	修士論文第一稿の作成①
第12回	修士論文第一稿の作成②
第13回	修士論文第一稿の作成③
第14回	修士論文中間報告会の報告資料の作成
第15回	修士論文中間報告会のリハーサル

到達目標

- ・先行研究を踏まえた調査データの分析において独自性を明確にすることができる。
- ・修士論文第一稿に着手し、論文の枠組みにあたる「問題の所在」「研究の目的」「研究方法」まで完成させる。
- ・第2回修士論文中間報告会に向けた準備をする。

履修上の注意

- ・調査日にデータ（フィールドノート）をPCでまとめ、データセッションを通して分析を深める。
- ・自分の研究テーマに関連する資料や文献を積極的に探索することが求められる。

予習・復習

- ・データセッションやデータ分析の討議において指摘された内容はその都度修正すること。
- ・各自で修士論文の作成を進めていくこと。

評価方法

先行研究の批判的検討・データ分析や討議・修士論文中間報告会の資料から総合的に評価する(100%)。

テキスト

各自の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅱで作成した研究計画と予備調査の結果を基に、本調査の計画を立てて実施する。本調査のデータ回収、入力を行い、目的に合った分析を行う。分析結果を検討し、修士論文の本文執筆に向けて整理できるよう指導を行う。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における指導事項の確認
第2回	予備調査の結果の検討と研究計画の修正：目的と方法の確認
第3回	予備調査の結果の検討と調査方法の修正：調査対象者・調査内容・手続き・分析の検討
第4回	予備調査の結果の検討と本調査の計画：調査対象者・調査内容・手続き・分析の決定
第5回	本調査の実施準備①：調査票作成など
第6回	本調査の実施準備②：調査対象者の手配など
第7回	本調査の実施①：調査票の配布など
第8回	本調査の実施②：データの回収など
第9回	本調査のデータ解析①：データの入力と整理
第10回	本調査のデータ解析②：データ特徴の確認
第11回	本調査のデータ解析③：統計分析
第12回	本調査のデータ解析④：発展的な統計分析
第13回	本調査のデータ解析⑤：質的データの検討など
第14回	本調査のデータ解析結果のまとめと報告
第15回	まとめと展望：教育課題研究Ⅳに向けて

到達目標

1. 研究の目的を明確にし、本調査の計画を立てる。
2. 本調査を実施し、目的に合った分析を行う。
3. 先行研究と課題の整理を行い、修士論文の執筆に向けた準備を進める。

履修上の注意

心理学の統計手法については、関連書籍などを読んで自ら学び理解することを期待する。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探究する時間を持つこと。

評価方法

研究に取り組む態度（50%）と課題の達成度・報告内容（50%）で総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅱに続き、修士論文完成に向けて、研究を精緻化していく。プレ調査による知見をもとに、本調査の計画・実施を行い、本格的なデータの分析の見通しを立てる。また、修士論文全体の構成や目次を作成する。適宜、他者との対話から研究の課題と可能性を見出し、先行研究における自らの研究の立ち位置を確認しながら、修士論文の執筆を進める。

授業計画

第1回	修士論文の構成や章立てについて
第2回	修士論文の目次作成
第3回	プレ調査の振り返りと本調査の実施の課題
第4回	本調査の具体的な計画
第5回	本調査の実施① 調査の進捗の報告
第6回	本調査の実施② データの整理
第7回	本調査の実施③ 分析の方向性の決定
第8回	研究データの分析方法
第9回	問いと分析結果からの考察
第10回	修士論文の目次の再検討
第11回	進捗状況の共有① 論文の見直し
第12回	進捗状況の共有② 今後の課題と計画
第13回	先行研究と修士論文の位置付け
第14回	国内外の研究との比較検討
第15回	修士論文中間報告会に向けた準備

到達目標

1. 研究の目的を明確にし、本調査の計画を立てる。
2. 本調査を実施し、問いに沿った分析を行うことができる。
3. 修士論文中間報告会にて適切な発表と質疑への応答ができる。

履修上の注意

さまざまな文献に触れる際に浮かんだ疑問や感想、意見などを書き留め、文献やノートを適切に整理すること。悩みや課題を積極的に授業で共有し、修士論文の執筆を計画的に進めること。学生の関心に応じて、学外の保育施設の保育実践を観察したり、また、学外のイベント（学会や研究会など）に参加して、研究内容や問いについて他の研究者と意見交換をしたりすることがある。

予習・復習

予習：関連する文献レビューを継続して行うこと。

復習：他者との対話を経て得た気づきを、修士論文の構成や内容の修正に反映させること。

評価方法

- ・ 修士論文の目次（50%）、授業内の発表や報告（50%）

テキスト

受講生の研究関心に応じて適宜紹介する。

授業概要

「教育課題研究Ⅱ」をもとに、授業実践に関する研究の部分的論文草稿から論文構成を検討する。具体的には、毎回の授業前半に、論文草稿に関わる研究指導教員の点検事項を授業参加者全員で考察し、授業後半は、研究指導教員による点検とその指導の下での草稿修正を行い、修士論文の完成をめざす。

授業計画

第1回	授業実践の省察：論文題目に関する「課題意識」を発表し合う。
第2回	研究計画の検討①：研究計画で取り上げた代表的な実践記録を読み合う。
第3回	研究計画の検討②：研究計画で取り上げた代表的な先行研究を読み合う。
第4回	研究計画の検討③：研究計画に関する「課題意識」を捉え直す。
第5回	論文草稿の検討①：部分的に作成した論文草稿を読み合う。
第6回	論文草稿の検討②：部分的に作成した論文草稿を読み合う。
第7回	論文構成の検討①：論文草稿の検討を踏まえて論文構成を考える。
第8回	論文草稿の検討③：部分的に作成した論文草稿を読み合う。
第9回	論文草稿の検討④：部分的に作成した論文草稿を読み合う。
第10回	論文構成の検討②：論文草稿の検討を踏まえて論文構成を考える。
第11回	論文草稿の検討⑤：部分的に作成した論文草稿を読み合う。
第12回	論文草稿の検討⑥：部分的に作成した論文草稿を読み合う。
第13回	論文構成の検討③：論文草稿の検討を踏まえて論文構成を考える。
第14回	論文題目の修正：「課題意識」に基づいた論文題目を練り直す。
第15回	研究計画の修正：論文題目に基づいた研究計画を練り直す。

到達目標

自分の「問題意識」を精緻化し、「課題意識」を明確化できるような「研究計画」に従って、独創性を発揮した修士論文の完成をめざして研究に取り組む。

履修上の注意

修士論文の独創性は、執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けるために、自分なりの研究ノートや文献目録づくりを工夫する。

予習・復習

授業における研究討議への積極的な参加が求められるので、あらかじめ準備をしておく。

評価方法

研究討議への積極的な参加（50%）、各回に提出する研究経過のレポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅱで着手した実践や調査を継続する。それとともに、第1回修士論文中間報告会での指摘・指導を踏まえ、教育課題研究Ⅱで行った実践や調査のデータの分析法や資料の扱い、読み取り、修士論文の章構成について見直す。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会（第1回）における指導事項の確認と章立て作成
第2回	予備調査の検討①：目的と方法の確認
第3回	予備調査の検討②：調査内容と分析の検討
第4回	本調査に向けて：調査内容・手続き・分析の検討と見通し
第5回	本調査の実施準備①（フィールド園の再検討）
第6回	本調査の実施準備②（手続きに必要な書面の準備等）
第7回	本調査の実施①（フィールド園A・B）
第8回	本調査の実施②（フィールド園C・D）
第9回	本調査の実施報告
第10回	本調査のデータ分析①（データの入力）
第11回	本調査のデータ分析②（「データ分析の計画」発表）
第12回	本調査のデータ分析③（「分析結果」の一部を発表）
第13回	本調査のデータ分析④（分析における問題点の洗い出しと追加調査の必要有無の確認）
第14回	本調査の分析のまとめと報告
第15回	修士論文中間報告会における指導事項の確認

到達目標

1. 問題意識に基づいて本調査（あるいは実践）と研究を進めていくことができる。
2. 自身の問題意識と研究テーマを明確な言葉で説明できる。
3. 研究に必要な資料およびフィールドを自身で探すことができる。

履修上の注意

自身の研究に対して、十分な時間と手間を惜しまない姿勢を持つ。
資料の探し方、研究の方法について、分からないことは積極的に質問する。

予習・復習

予習：授業で検討予定の資料は熟読し、批判または別の視点の提示ができるようにしておく。
復習：授業で出た課題（疑問点や自身の研究についての修正点など）は必ず詳細なメモとして残すようにする。

評価方法

授業への参加度（討議・発表）40%、研究への取り組み 60%

テキスト

テキストは特に指定しない。
各自の研究内容に応じて、資料を提示する。

授業概要

本演習では、第 1 回修士論文中間報告会で指摘された課題を踏まえ、教育課題研究Ⅱで立案した調査計画を実施し、得られたデータの分析・考察について指導する。そして、算数・数学教育を主題とした修士論文の結論部分の検討を行う。また、演習の後半では、第 2 回修士論文中間報告会に向けた発表の準備を行うことを通して、得られた研究の成果の精緻化に努める。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション：教育課題研究Ⅱで立案した調査計画の再確認
第 2 回	研究倫理の遵守①：研究不正・研究公正について
第 3 回	研究倫理の遵守②：ヒトを対象とする研究に関する倫理審査について
第 4 回	調査計画の実施①：フィールドへの介入
第 5 回	調査計画の実施②：参与観察
第 6 回	調査計画の実施③：研究仮説の導出
第 7 回	調査計画の実施④：インタビュー調査
第 8 回	得られたデータの分析①：フィールドノート、発話記録の整理
第 9 回	得られたデータの分析②：発話記録のコーディング作業
第 10 回	得られたデータの分析③：研究テーマ、目的、仮説のすり合わせ
第 11 回	考察部分の検討①：研究の新規性の検討
第 12 回	考察部分の検討②：研究の有用性の検討
第 13 回	第 2 回修士論文中間報告会のための資料の作成
第 14 回	第 2 回修士論文中間報告会のリハーサル
第 15 回	まとめ：第 2 回修士論文中間報告会のリフレクションと研究成果の見直し

到達目標

- ・調査における研究倫理の遵守について理解することができる。
- ・自身の研究テーマに沿った調査計画を実施することができる。
- ・第 2 回修士論文中間報告会において、得られた研究の成果やその新規性などを説明することができる。

履修上の注意

- ・「教育課題研究Ⅰ」「教育課題研究Ⅱ」を履修済みであることが望ましい。
- ・修士論文を書き上げるためには、論理的に文章を書くことが求められる。必要に応じて、次の書籍を参照されたい。

本多勝一(2015). 新版 日本語の作文技術. 朝日新聞出版.

予習・復習

予習：各回のテーマに応じたレジュメを作成する。また、調査に向けた準備を行う。

復習：授業内で受けた指摘をまとめるとともに、次回以降の授業に向けて改善を行う。

評価方法

- ・授業内の発表・レジュメ(40%)、調査の分析・考察(30%)、中間報告会(30%)で評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。履修者の関心に応じて、適宜資料を配布する。また、必要に応じて、下記の参考文献を参照されたい。

中原忠男(編) (2001). 算数・数学科重要用語 300 の基礎知識. 明治図書.

日本教科教育学会(編) (2017). 教科教育研究ハンドブック：今日から役立つ研究手引き. 教育出版.

日本数学教育学会(編) (2011). 数学教育学研究ハンドブック. 東洋館出版社.

日本数学教育学会(編) (2018). 算数教育指導用語辞典〔第五版〕. 教育出版.

日本数学教育学会(編) (2021). 算数・数学 授業研究ハンドブック. 東洋館出版社.

全国数学教育学会(編) (2024). 数学教育学の軌跡と展望：研究のためのハンドブック. ナカニシヤ出版.

授業概要

教育課題研究Ⅲ及び中間報告会を通して明らかになった課題を修正するとともに、研究テーマに関わる文献収集を継続する。そして、収集された資料やデータの分析、理論的・批判的討論等を通して考察を深めて修士論文を完成させ、発表会での発表を行うことができるように指導する。

授業計画

第1回	中間報告会で明らかになった課題や理科教育関係学会誌（理科教育研究、環境教育、農業教育学会誌など）を参考に論文の構成を確認する。
第2回	中間報告会で明らかになった課題や自身の研究テーマに係わる既往研究の再レビューを通して、「研究の背景と目的」部分の加筆・修正を行う。
第3回	各自が加筆・修正した「研究の背景と目的」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第4回	再考された「研究の背景と目的」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。
第5回	中間報告会で明らかになった課題や既往研究の再レビューを通して、「研究方法」部分の加筆・修正を行う。
第6回	各自が加筆・修正した「研究方法」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第7回	再考された「研究方法」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに微修正して完成させる。
第8回	中間報告会で明らかになった課題を基にデータの集計・解析方法を再検討する。文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に改めて集計・解析を行う。
第9回	再集計・再解析した結果について、中間報告会で明らかになった課題や文献情報、討論・批判的検討から得た情報を基に再確認し、「結果及び考察」部分の加筆・修正を行う。
第10回	各自が加筆・修正した「結果及び考察」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に再考する。
第11回	加筆・修正して再考された「結果及び考察」部分について、修正箇所を示しながら発表し、討論・批判的検討から得た情報をもとに修正して完成させる。
第12回	ここまでで得られた成果を基に「総合考察」部分の執筆を行う。そして、討論・批判的検討から得た情報を基に修正の検討を行う。
第13回	各自が修正した「総合考察」部分に対して、修正の検討を行う。討論・批判的検討から得た情報を基に修正し、修士論文を完成させる。
第14回	「研究の背景と目的」から「総合考察」までの修士論文の内容を要約し、プレゼンテーションソフトを用いて修士論文発表会で発表するための準備を行う。
第15回	修士論文発表会に向けたゼミ内の検討会を行い、討論・批判的検討から得た情報を基に内容及び発表方法の修正を行い、修士論文発表会に向けた準備を完了する。

到達目標

1. 中間報告会までに明らかになった課題を修正し、研究の方向性を正しく定めることができる。
2. データを分析し、討論等を通して研究テーマについて考察を深めることができる。
3. 修士論文を完成させ、修士論文発表会での発表を行うことができる。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

出席と発表内容(20%)、討論への参加状況(10%)、研究への意欲(10%)及び修士論文の内容・発表(60%)などを総合的に判断して評価する。

テキスト

院生個々に即して研究の進展に伴い随時指示する。

授業概要

教育研究課題Ⅲまでの作業をふまえ、修士論文の完成を目指す。学位請求論文としての水準を満たしているかについて、あらゆる角度から点検する。さらに論文の結論として示される「知見」が専門の領域においてどのような学問的貢献を果たすことになるのか明確にする。

授業計画

第 1 回	第 2 回中間報告会の反省～論文完成に向けての最終再点検。
第 2 回	修士論文完成に向けて①～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 3 回	修士論文完成に向けて②～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 4 回	修士論文完成に向けて③～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 5 回	修士論文完成に向けて④～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 6 回	修士論文完成に向けて⑤～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 7 回	修士論文完成に向けて⑥～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 8 回	修士論文完成に向けて⑦～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 9 回	修士論文完成に向けて⑧～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 10 回	修士論文完成に向けて⑨～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 11 回	修士論文完成に向けて⑩～進捗状況の報告と原稿の検討。
第 12 回	論文の「結論」に対する検討
第 13 回	論文の「結論」に対する修正
第 14 回	修士論文報告会への準備①プレゼン資料の作成
第 15 回	修士論文報告会への準備②報告リハーサル

到達目標

1. 修士号請求論文を完成させる。
2. 修士号請求論文にふさわしい水準を担保する。
3. 論文の結論として示される「知見」の学問的位置づけを明らかにする。

履修上の注意

論文執筆に集中して取り組み、毎回の指導でその進捗状況を報告すること。論文は繰り返し検討され、修正を重ねていくことになる。そうした作業に謙虚に取り組む姿勢が求められる。

予習・復習

論文完成までの作業スケジュールを自ら立て、管理すること。

評価方法

修士論文の内容（100％）で評価する。

テキスト

研究の進捗状況に応じて、適宜指示する。

授業概要

調査結果に対して目的に応じた考察を深め、修士論文の完成を目指す。科学的根拠に基づくことはもちろん、問題解決のための具体的な提言に繋がること、幼稚園・小学校等における教育実践に寄与することを条件に、十分な水準を担保した修士論文となるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における指摘事項の確認
第2回	修士論文中間報告会における指摘事項への対応
第3回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・1 中間報告会等での成果を踏まえ、仮説の検証により効果的な分析方法を再検討するとともに、分析方法に大きな変更が無かった場合も始めから再分析を行い、第3者による計算のチェックを受けることで、データの信頼性を確保する。
第4回	分析方法の再検討、再分析および相互検算・2
第5回	図表の表現等の再検討 グラフや表等について、データの表現として適切であるか、複数の表現方法を比較することで検討し、「何を表すか」と同様に「どうやって表すか」ということの重要性を知る。
第6回	先行研究の再確認と参考資料の追加を通じた研究の独自性の確認 一連の調査分析・考察の概略をまとめた後、改めて先行研究を見直すことで、自身の主張の独自性や、その根拠となるエビデンスの妥当性を再確認する。
第7回	修士論文作成と進捗状況の発表・1 第6回までの内容を踏まえ、各論的な修正を踏まえながら、修士論文本体の作成を行う。参加者は毎週進捗状況の報告を義務づけ、無理なく論文作成が可能なスケジュール管理を徹底する。
第8回	修士論文作成と進捗状況の発表・2
第9回	修士論文作成と進捗状況の発表・3
第10回	修士論文作成と進捗状況の発表・4
第11回	修士論文作成と進捗状況の発表・5
第12回	修士論文第一稿発表 第一稿を比較的早く提出することで、全体の構成の調整や部分的な再分析を可能にし、論文としての完成度を高めることを目指す。
第13回	修士論文発表会プレゼン資料の作成と修士論文の修整
第14回	修士論文発表会リハーサルと修士論文の修整
第15回	修士論文最終稿発表および校正

到達目標

1. 科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。
2. 先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。
3. 具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。

履修上の注意

修士論文作成にあたっては余裕を持って取組み、スケジュールを厳守すること。
論文が水準に満たない場合は、修士論文発表会への参加を認めない場合がある。

評価方法

修士論文の内容を中心（100％）に総合的に判断する。

テキスト

特に定めない。適宜資料を配布する。

授業概要

2 年次春期までに積み重ねた発達障害に関する研究について、データ収集と分析を行い、仮説を検証する。それまでに作成した部分的論文草稿と照らし合わせ、論文構成を見直しつつ、研究の限界と課題を明確にし、修士号請求論文を完成させる。また、修士論文の発表を行う。

授業計画

第 1 回	中間発表の意見をもとに論文全体の構成、研究計画を確認する
第 2 回	中間発表の意見をもとに論文の見直しを図る
第 3 回	収集・分析したデータによる仮説の検証方法を検討する
第 4 回	分析結果と仮説の一致・不一致箇所を確認する
第 5 回	分析結果と仮説の一致箇所に関して解釈し、文献整理を行う
第 6 回	分析結果と仮説の不一致箇所に関する文献整理の仕方について検討する
第 7 回	仮説と結果の対応関係について検討し、論文構成を図式化する
第 8 回	結果に用いる図表と分析結果を定める
第 9 回	研究対象や方法を整理し、必要に応じて文献による補完を行う
第 10 回	序論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第 11 回	結論の内容を見直し、必要に応じて文献による補完を行う
第 12 回	研究の限界と将来の課題について検討しつつ、文献による補完を行う
第 13 回	修士号請求論文内容を全体構成の観点から検討し、論文完成を促す
第 14 回	修士号請求論文発表に向けて原稿を作成する
第 15 回	まとめ 修士号請求論文提出に向けて

到達目標

1. 修士号請求論文を完成させる。
2. 発達障害研究における修士号請求論文の内容の位置づけを認識する。
3. これまでの一連の研究活動を通じて、発達障害のある児童への教育的支援を実践する高度専門職としての専門性を身につける。

履修上の注意

全ての授業に出席するとともに、自身の発表に関しては、必ずレジメを準備して臨むこと。

評価方法

論文草稿、研究の進捗状況及び修士号請求論文発表原稿により評価する(100%)。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅲまでに検討した先行研究、実施した調査結果の分析に基づき、修士論文全体を作成する。また、作成した修士論文について、要旨を作成し、自らの研究内容について、簡潔に説明・発表できるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文完成に向けた計画の確認
第2回	論文の章立ての構想
第3回	分析結果に対する考察（1）：先行研究との対応の検討
第4回	分析結果に対する考察（2）：本研究のオリジナリティの検討
第5回	問題と目的の執筆・確認
第6回	研究方法の執筆・確認
第7回	分析結果の執筆・確認
第8回	考察・引用文献の執筆・確認
第9回	修士論文全体の整合性の確認（1）
第10回	修士論文全体の整合性の確認（2）
第11回	修士論文要旨を作成する
第12回	修士論文最終報告会に向けた資料の作成
第13回	修士論文最終報告会に向けた資料の検討
第14回	修士論文最終報告会のリハーサル
第15回	まとめと展望

到達目標

1. 修士論文本文を執筆することができる。
2. 修士論文の要旨を作成することができる。
3. 修士論文に関する発表資料を作成することができる。

履修上の注意

基礎的な心理・統計学の知識については授業の中でも説明するが、自らも書籍などを読み、学習することが望ましい。

自身の研究に向き合う時間を十分にとり、主体的、積極的に取り組むこと。

予習・復習

予習：自身の研究の意義や課題を整理する。

復習：発表や議論を踏まえ、自身の研究の意義や課題を再検討する。

評価方法

最終報告会の資料や発表：50%

修士論文の内容：50%

テキスト

テキストは特に指定しない。

個々人の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅲまでに立案した研究計画及び実施した本検証授業の結果に基づき、修士論文執筆に着手し、完成させる。自身のリサーチクエストから得られた知見について、学術的意義とオリジナリティが確保され、水準を満たした論文となるよう、各自の研究テーマに応じて指導する。また、修士論文最終報告会に向けて論文概要（発表資料）を作成し、自らの研究内容について、簡潔に説明・発表できるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会②での質問事項の確認と修正
第2回	修士論文執筆①：草立て
第3回	修士論文執筆②：緒言
第4回	修士論文執筆③：目的
第5回	修士論文執筆④：方法
第6回	修士論文執筆⑤：結果
第7回	修士論文執筆⑥：考察
第8回	修士論文執筆⑦：結論、引用参考文献、巻末資料
第9回	修士論文執筆⑧：全体構成
第10回	修士論文執筆⑨：要旨作成
第11回	修士論文最終報告会準備①：プレゼン作成
第12回	修士論文最終報告会準備②：発表原稿作成
第13回	修士論文最終報告会 発表練習
第14回	修士論文最終報告会準備：完成
第15回	まとめと今後の展望

到達目標

- 教育研究課題Ⅲまでの作業を踏まえて修士論文を完成させることができる。
- 修士論文の要旨を作成することができる。
- 修士論文に伴う発表資料を作成することができる。

履修上の注意

- 修士論文作成までのスケジュールを立て、逆算をしてやらなければいけないことをその都度明確にするなど、進捗の管理を自らすること。

予習・復習

- 修士論文の完成までのスケジュールをその都度逆算しながら、やらなければいけないことを明確にし、日々の生活の中で意図的に執筆時間を確保すること。

評価方法

- 次のように評価する。
- ①修士論文（50%）
 - ②最終報告会での発表内容（30%）
 - ③修士論文完成までのスケジュール遂行状況（20%）

テキスト

- 各自の状況に応じて、適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅲで実施した本調査の結果の分析に基づき、考察を進める。検討してきた先行研究を整理して、問題と目的から結果と考察までの流れをまとめ、修士論文を完成させる。修士論文最終報告会における資料をまとめ、自身の研究内容について簡潔に発表できるようにする。説得力のある理論的背景と心理学的研究手法に基づき、問題解決、発達支援に貢献できる、十分な水準を満たした修士論文となるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文完成に向けた計画の確認／報告会での指摘内容の検討
第2回	修士論文の内容の確定と構成の確認
第3回	本調査の分析結果のまとめと図表の整理
第4回	本調査の分析結果に関する考察
第5回	修士論文の執筆に関する確認：問題と目的
第6回	修士論文の執筆に関する確認：方法・結果
第7回	修士論文の執筆に関する確認：考察と今後の課題・引用文献
第8回	修士論文執筆の進捗状況の報告と修正①
第9回	修士論文執筆の進捗状況の報告と修正②
第10回	修士論文の全体の構成の確認
第11回	修士論文の全体の整合性の確認
第12回	修士論文最終報告会に向けたプレゼン資料の作成
第13回	修士論文最終報告会に向けたプレゼン資料の修正
第14回	修士論文最終報告会リハーサルと本文の修正
第15回	修士論文最終稿発表／まとめと展望

到達目標

1. 十分な水準を満たした修士論文を完成させることができる。
2. 修士論文に関する発表資料を作成し、正確に発表することができる。
3. 自身の研究テーマの今後の展望および実践への貢献について認識することができる。

履修上の注意

修士論文完成に向けて、適切なスケジュール感を持って研究・執筆を進めること。

予習・復習

指定された文献および自分の研究に関連する文献を読み込み、自分の考えを探究する時間を持つこと。

評価方法

修士論文の内容を中心に総合的に評価する。

テキスト

特に指定しない。研究テーマに即して文献などを紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅲまでに立案した研究計画および実施した本調査の結果に基づき、本格的な修士論文執筆に着手し、完成させる。水準を満たした論文となるよう、各自の研究テーマに応じて指導する。修士論文最終報告会に向けて、自身の研究内容について簡潔にまとめ、説明できるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会②での指摘内容を踏まえた論文構成の再検討
第2回	修士論文完成に向けて①序章の執筆
第3回	修士論文完成に向けて②本論の執筆
第4回	修士論文完成に向けて③本論全体の整理
第5回	修士論文完成に向けて④本論の推敲
第6回	修士論文完成に向けて⑤結論の執筆
第7回	修士論文完成に向けて⑥文献リストの確認と整理
第8回	修士論文完成に向けて⑦論文構成の確認
第9回	修士論文全体の整合性についての検討
第10回	修士論文全体の最終確認
第11回	修士論文要旨の作成
第12回	修士論文最終報告会に向けた発表原稿の作成
第13回	修士論文最終報告会に向けた発表原稿の検討
第14回	修士論文最終報告会に向けたリハーサル
第15回	まとめと今後の展望

到達目標

1. 修士論文を執筆し、完成させることができる。
2. 修士論文の要旨を作成することができる。
3. 修士論文発表に伴う発表資料を作成する。

履修上の注意

履修上の注意

自身の研究に関連する文献、資料を積極的に検索し、クリティカルに読解する力が求められる。

予習・復習

予習・復習

予習：修士論文執筆において、計画的かつ十分な準備をして参加すること。

復習：自身の考えや研究内容を熟考、整理する時間を設け、自主学習に努めること。

評価方法

評価方法

修士論文 50%、報告会発表 50%

テキスト

テキスト

テキストは特に指定しない。

各自の状況に応じて、適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅳでは、研究の問いと方法論の関係性や調査・分析方法、論文全体の枠組みの修正点について指導し、それを踏まえて修士論文を完成させる。また、修士論文最終報告会に向けて論文概要（発表レジュメ）を作成し、各自の研究内容を発表・対話・応答することを通して、他者と共に研究の新たな世界を構築していく。

授業計画

第1回	イントロダクション——修士論文中間報告会の課題の整理とその修正
第2回	修士論文の構成①——論文執筆及び調査・分析方法と研究倫理
第3回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化①——研究デザイン・配置の微調整
第4回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化②——会話分析記述の調整
第5回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化③——ディスコース分析記述の調整
第6回	修士論文執筆と各自の課題・悩みの共有化④——ドキュメント分析記述の調整
第7回	修士論文の構成②——共同による一次稿の批判的検討1
第8回	先行研究の再調査と研究の問い及び方法論の精緻化——共同による一次稿の批判的検討2
第9回	各自の研究テーマに関する新たな動向の再確認——共同による一次稿の批判的検討3
第10回	各自の研究の今後の課題や展望に対する考察——共同による一次稿の批判的検討4
第11回	修士論文最終報告会の最終調整——発表対象・司会と運営・審査基準・発表準備・謝意
第12回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策①——研究内容と課題の整理
第13回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策②——ストーリーラインの設定
第14回	論文概要（発表レジュメ等）の作成と質疑応答の対策③——主張と質疑応答の再確認
第15回	修士論文最終報告会に向けて——研究の意義と今後の課題の再考

到達目標

1. 一次稿を関係者の批判をもとに推敲・改訂し、修士論文を完成する。
2. 最終報告会で発表・対話・応答することで、自身の研究の意義や課題を確認することができる。

履修上の注意

教育課題研究Ⅳでは、研究の内容や方法について関係者と共に検討しながら、修士論文を完成させる。また、各自の研究内容を発表・対話・応答することを通して、研究の新たな世界を構築することになる。大学院生の関心や成長に応じて、学外の国立国会図書館や研究機関等で調査したり、学外での学会や研究会に参画し、研究者や関係者に向けて発表してコメントを頂戴したりすることもある。

予習・復習

学内外の研究者や専門家等との対話を通じて、自身の研究の意義や課題について再検討するとともに、自身の専門領域の今後の課題や方向性について検討していただく。

評価方法

- ・修士論文：50%
- ・最終報告会での資料や発表：50%

テキスト

文献については、適宜紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅲまでの作業と中間報告会で明らかになった課題を修正し、修士論文の完成を目指す。学位請求論文としての水準を満たした論文となるよう、問いと分析内容の確認・専門領域における学問的寄与を追究していく。また、修士論文の最終報告会に向けて、自分自身の研究内容を簡潔にまとめ、質疑応答に答えられるように準備する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会における指導事項の確認
第2回	修士論文中間報告会における指導事項の修正対応
第3回	修士論文の進捗状況の報告① 論文構成
第4回	修士論文の進捗状況の報告② 先行研究に対する位置づけ
第5回	修士論文の進捗状況の報告③ 分析
第6回	修士論文の進捗状況の報告④ 分析
第7回	修士論文の進捗状況の報告⑤ 分析
第8回	修士論文の進捗状況の報告⑥ 研究の課題の明確化
第9回	修士論文の進捗状況の報告⑦ 序章の再検討
第10回	修士論文の進捗状況の報告⑧ 終章の再検討
第11回	修士論文の進捗状況の報告⑨ 全体の修正
第12回	修士論文の進捗状況の報告⑩ 書き上げ
第13回	修士論文最終報告会の資料作成
第14回	修士論文最終報告会のリハーサル
第15回	修士論文最終報告会の資料修正・準備

到達目標

- ・中間報告会までに明らかになった課題を修正し、研究の方向性を正しく定めることができる。
- ・データを分析し、討論等を通して研究テーマについて考察を深めることができる。
- ・修士論文を完成させ、修士論文最終報告会での報告を行うことができる。

履修上の注意

- ・論文執筆を計画的に進め、毎回の指導の際に進捗状況を報告すること。
- ・指導の際の指摘は次回までの修正すること。

予習・復習

- ・執筆スケジュールを立てて、積極的に執筆を進めていくこと。
- ・毎回、修士論文を書き進めていくこと。

評価方法

修士論文の内容・発表などを総合的に評価する(100%)。

テキスト

各自の研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅲで実施した本調査の結果の分析に基づき、考察を進める。検討してきた先行研究を整理して、問題と目的から結果と考察までの流れをまとめ、修士論文を完成させる。修士論文最終報告会における資料をまとめ、自身の研究内容について簡潔に発表できるようにする。説得力のある理論的背景と心理学的研究手法に基づき、問題解決、発達支援に貢献できる、十分な水準を満たした修士論文となるように指導する。

授業計画

第1回	修士論文完成に向けた計画の確認
第2回	修士論文の内容の確定と構成の確認
第3回	本調査の分析結果のまとめと図表の整理
第4回	本調査の分析結果に関する考察
第5回	修士論文の執筆に関する確認：問題と目的
第6回	修士論文の執筆に関する確認：方法・結果
第7回	修士論文の執筆に関する確認：考察と今後の課題・引用文献
第8回	修士論文執筆の進捗状況の報告と修正①
第9回	修士論文執筆の進捗状況の報告と修正②
第10回	修士論文全体の構成の確認
第11回	修士論文全体の整合性の確認
第12回	修士論文最終報告会に向けた資料の作成
第13回	修士論文最終報告会に向けた資料の修正
第14回	修士論文最終報告会のリハーサルと本文の修正
第15回	修士論文最終稿発表／まとめと展望

到達目標

1. 修士論文本文を執筆する。
2. 修士論文の発表資料を作成する。
3. 自身の研究テーマの今後の展望および実践への貢献について認識する。

履修上の注意

修士論文完成に向けて、余裕を持って研究・執筆を進めること。

予習・復習

指定した文献等を読み込み、自身の研究に向き合う時間を十分にとること。

評価方法

最終報告会の資料や発表：50%
 修士論文の内容：50%

テキスト

テキストは特に指定しない。研究テーマに即して文献等を紹介する。

授業概要

教育課題研究Ⅲに続き、修士論文に取り組み、適切な水準の修士論文を完成させる。また、修士論文の最終報告会に向けたプレゼンテーションの準備を行い、適切に自身の研究について発表し、他者と意義のある対話を行う。保育・幼児教育の実践の発展に寄与する質の高い修士論文となるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会での指摘内容の検討
第2回	修士論文の目次の再検討と確定
第3回	データの分析の再検討と問いの再設定
第4回	修士論文執筆の進捗報告① 序章
第5回	修士論文執筆の進捗報告② 問題と目的、方法
第6回	修士論文執筆の進捗報告③ 分析結果
第7回	修士論文執筆の進捗報告④ 総合考察
第8回	研究テーマにおける研究動向の再確認と修士論文の位置付け
第9回	暫定原稿のピアレビュー① 問いと総合考察の深化
第10回	暫定原稿のピアレビュー② 倫理的配慮の確認
第11回	暫定原稿のピアレビュー③ 課題の整理と全体の統合性の確認
第12回	課題の整理と修士論文全体の構成の再検討
第13回	最終報告に向けた発表資料の作成
第14回	最終報告に向けたリハーサル
第15回	最終報告に向けた質疑応答の対策

到達目標

1. 修士号にふさわしい質の高い修士論文を完成させる。
2. 最終報告での発表と対話を経て、自身の研究の意義や課題を確認することができる。

履修上の注意

修士論文の完成に向けて、積極的に執筆に取り組むこと。活発に研究内容について議論し、研究の意義を意識しながら進めること。学生の関心に応じて、学外の保育施設の保育実践を観察したり、また、学外のイベント（学会や研究会など）に参加して研究者と対話をし、修士論文執筆における困難や課題に対するヒントや助言を得るための意見交換を行うことがある。

予習・復習

予習：関連する文献レビューを継続して行うこと。

復習：対話から見出された研究の位置付けや意義を意識して、修士論文の構成や内容を修正すること。

評価方法

- ・ 修士論文（50%）、最終報告における発表資料および質疑応答（50%）

テキスト

受講生の研究関心に応じて適宜紹介する。

授業概要

「教育課題研究Ⅲ」をもとに、授業実践に関する研究の部分的論文草稿から論文構成を検討する。具体的には、毎回の授業前半に、論文草稿に関わる研究指導教員の点検事項を授業参加者全員で考察し、授業後半は、研究指導教員による点検とその指導の下での草稿修正を行い、修士論文を完成する。

授業計画

第1回	授業実践の省察：研究計画に関する「課題意識」を発表し合う。
第2回	論文構成の検討①：論文構成で取り上げた代表的な実践記録を読み合う。
第3回	論文構成の検討②：論文構成で取り上げた代表的な先行研究を読み合う。
第4回	論文構成の検討③：論文構成に関する「課題意識」を捉え直す。
第5回	論文草稿の検討①：全体的な論文草稿の一部を取り上げて読み合う。
第6回	論文草稿の検討②：全体的な論文草稿の一部を取り上げて読み合う。
第7回	論文構成の検討①：論文草稿の検討を踏まえて論文構成を練り直す。
第8回	論文草稿の検討③：全体的な論文草稿の一部を取り上げて読み合う。
第9回	論文草稿の検討④：全体的な論文草稿の一部を取り上げて読み合う。
第10回	論文構成の検討②：論文草稿の検討を踏まえて論文構成を練り直す。
第11回	論文草稿の検討⑤：全体的な論文草稿の一部を取り上げて読み合う。
第12回	論文草稿の検討⑥：全体的な論文草稿の一部を取り上げて読み合う。
第13回	論文構成の検討③：論文草稿の検討を踏まえて論文構成を練り直す。
第14回	論文概要の作成：論文の研究内容を整理して読み合う。
第15回	発表原稿の作成：発表会に向けて原稿を作成して発表し合う。

到達目標

自分の「問題意識」を精緻化し、「課題意識」を明確化できるような「研究計画」に従って、独創性を発揮した修士論文の完成をめざして研究に取り組む。

履修上の注意

修士論文の独創性は、執筆者が日常的な「問題意識」を研究レベルの「課題意識」に高め、それに基づく「研究計画」に支えられる。「問題意識」を大事に育み、強く維持し続けるために、自分なりの研究ノートや文献目録づくりを工夫する。

予習・復習

授業における研究討議への積極的な参加が求められるので、あらかじめ準備をしておく。

評価方法

研究討議への積極的な参加（50%）、各回に提出する研究経過のレポート（50%）から総合的に評価する。

テキスト

適宜、授業で提示する。

授業概要

教育課題研究Ⅲの期間に追加された分も加えたすべての実践や調査のデータについて分析・考察を行う。研究の妥当性・客観性について批判的な視点で見直すとともに、先行研究との比較も行い、修士論文としての水準を満たす論文にまとめあげる。作成した修士論文のテーマや仮説、研究の概要、考察と結論などを明確な意識を持って発表できるよう指導する。

授業計画

第1回	修士論文中間報告会（第2回）での指摘事項の整理と論文構成の検討
第2回	論文の構造の確認と修士論文の下書き①（構成表の作成）
第3回	修士論文の下書き②（構成表をもとにした執筆）
第4回	修士論文の執筆①序章と結論の下書き
第5回	修士論文の執筆②本論の下書き
第6回	本論についての再検討（仮説、調査、分析、結論の整合性）と追加調査の必要の有無
第7回	修士論文の執筆③序章の執筆（追加調査が必要な場合：フィールド園での調査）
第8回	修士論文の執筆④序章の仕上げ（追加調査が必要な場合：フィールド園での調査）
第9回	修士論文の執筆⑤本論の下書き（先行研究の取り扱いについての検討）
第10回	修士論文の執筆⑥本論の下書き（調査の分析と考察）
第11回	修士論文の執筆⑦本論の執筆
第12回	修士論文の執筆⑧結論の執筆
第13回	修士論文要旨の作成
第14回	修士論文最終報告会の準備（発表原稿とスライド）
第15回	修士論文最終報告会のリハーサルと修正

到達目標

1. 修士論文を執筆し、完成させることができる。
2. 修士論文の要旨を作成することができる。
3. 修士論文発表に伴う発表資料を作成する

履修上の注意

自身の研究に対して、十分な時間と手間を惜しまない姿勢を持つ。
資料の探し方、研究の方法について、分からないことは積極的に質問する。

予習・復習

予習：論文執筆がスムーズに行えるよう分析結果や先行研究の資料などを整理しファイリング、見出しをつけるなど準備をしておく。
復習：授業で指摘された事項や、研究上生じた問題を解決する方法をまとめておく。

評価方法

授業への参加度（討議・発表）40%、研究への取り組み 60%

テキスト

テキストは特に指定しない。
各自の研究内容に応じて、資料を提示する。

授業概要

本演習では、教育課題研究Ⅲまでで得られた研究成果を踏まえ、算数・数学教育に関する修士論文の完成を目指す。そして、研究成果が数学教育学研究において十分な新規性や有用性などを有するものとなるよう、論文執筆や論構成について指導する。

授業計画

第1回	オリエンテーション：教育課題研究Ⅲで得られた研究成果の再確認
第2回	修士論文における論構成（章立て）の検討
第3回	修士論文の執筆①：第1章・先行研究のレビュー
第4回	修士論文の執筆②：第2章・調査の対象と方法
第5回	修士論文の執筆③：第3章・調査データの記述
第6回	修士論文の執筆④：第4章・考察
第7回	修士論文の執筆⑤：序章・問題の所在
第8回	修士論文の執筆⑥：終章・総合的考察
第9回	修士論文の見直し①：レイアウト・図表の見直し
第10回	修士論文の見直し②：論構成の見直し
第11回	修士論文の見直し③：先行研究の過不足の確認
第12回	修士論文の見直し④：全体の最終確認
第13回	修士論文発表会のための資料の完成
第14回	修士論文発表会のリハーサル
第15回	まとめ：修士論文発表会のリフレクションと修士論文最終稿の完成

到達目標

- ・これまでに得られた研究成果を踏まえた、算数・数学教育に関する修士論文を執筆することができる。
- ・研究成果が数学教育学研究において十分な新規性や有用性などを有することを、論理的に説明することができる。

履修上の注意

- ・「教育課題研究Ⅰ」「教育課題研究Ⅱ」「教育課題研究Ⅲ」を履修済みであることが望ましい。
 - ・修士論文を書き上げるためには、論理的に文章を書くことが求められる。必要に応じて、次の書籍を参照されたい。
- 本多勝一(2015). 新版 日本語の作文技術. 朝日新聞出版.
- ・これまでの研究の進捗に応じて、学会発表を行うこともある。

予習・復習

予習：各回のテーマに応じたレジュメを作成する。

復習：授業内で受けた指摘をまとめるとともに、次回以降の授業に向けて改善を行う。

評価方法

- ・授業内の発表・レジュメ(20%)、修士論文(40%)、修士論文発表会(40%)で評価する。

テキスト

テキストは特に指定しない。履修者の関心に応じて、適宜資料を配布する。また、必要に応じて、下記の参考文献を参照されたい。

中原忠男(編)(2001). 算数・数学科重要用語 300 の基礎知識. 明治図書.

日本教科教育学会(編)(2017). 教科教育研究ハンドブック：今日から役立つ研究手引き. 教育出版.

日本数学教育学会(編)(2011). 数学教育学研究ハンドブック. 東洋館出版社.

日本数学教育学会(編)(2018). 算数教育指導用語辞典〔第五版〕. 教育出版.

日本数学教育学会(編)(2021). 算数・数学 授業研究ハンドブック. 東洋館出版社.

全国数学教育学会(編)(2024). 数学教育学の軌跡と展望：研究のためのハンドブック. ナカニシヤ出版.